

何を求めて離島へ嫁ぐのか - 都市に住む若い女性の離島に対する意識と大島村に 嫁いだ女性達の意識に関する比較研究 -

稲富 智子

北九州大学文学部人間関係学科

要旨

本論文では、離島における嫁不足の問題と都市部女性の意識の変容との関連性について、及び離島に関する都市部女性の意識と実際に離島に居住している女性や本土から嫁いできた女性の実状との比較・分析をおこなった。

その結果、従来から離島における嫁不足が問題とされてきたが、現在では女性の結婚に対する意識が「外的条件」から「質的条件」へと変わり、嫁のきての地域格差がなくなりつつあるということがわかった。

これまでの離島振興は、既に離島に居住している人々を対象とした公共事業、設備投資などの「ハード面の充実」に力を注ぐことで島の活性化を図ろうとするものが主立っていた。しかし今後の離島振興策としては、ハード面ばかりに目を向けるのではなく、これから島に移住しようとする人々や嫁いでくる女性の不安を解消し、かつ支援できるような人間関係のネットワークづくり・地域社会づくりなどといった「ソフト面」を重視したものでなくてはならない。このようなソフト面に重きを置く離島振興策が、これまであまりにも重要視されていなかったと思われる。

女性の意識や価値観が変化し、離島自体の変化も必要とされる現在、離島における地域社会の新たな在り方の模索などの質的条件の向上が離島に嫁いでくる女性ならびに幅広い年齢層の増加へ実を結びといえる。

事実、事例としてあげた大島では、本土から嫁いでくる女性の占める割合が年々増加傾向にあり、これによって大島の社会の在り方も変わりつつある。このような島の変化と女性の意識変化においてうまく接点を見出すことができれば、離島の嫁不足を解消するさらなる相乗効果が期待できるのである。

目次

はじめに	4 - 4 離島に対する不安、ストレス要因に関する分析
第1章 離島とは何か	4 - 5 離島における結婚後の就業(継続)希望に関する分析
第2章 調査対象離島について	4 - 6 教育環境に関する分析
2 - 1 調査対象離島の選定	4 - 7 介護問題に関する分析
2 - 2 大島の紹介	第5章 離島におけるインタビュー
第3章 研究方法	第6章 考察
3 - 1 調査方法	6 - 1 離島男性との出会いについて
3 - 2 調査概要	6 - 2 離島に対する女性の期待、不安要素について
第4章 都市部女性による意識調査の結果と分析	6 - 3 大島における仕事・教育・福祉について
4 - 1 回答者の属性について	結論
4 - 2 離島男性との出会いに関する分析	
4 - 3 離島に関する期待感、求めていることに関する分析	

はじめに

離島地域は、狭小性、後進性、隔絶性、環海性という言葉で語られることが多く、以前から本土と比較すると条件的に不利益な地域とされてきた。これらの不利益な条件下にある離島では、実際に高度経済成長期を境に多くの人口が流出し(表-1)、その結果離島の地域社会の存続に大きな影響を及ぼし、危機感をもたらした。その一つとして、嫁不足の問題があげられる。

しかし、現在に至っては「離島だから嫁不足」というような地域格差は狭まりをみせ、その地域や結婚相手の「質」が女性の間では重要視されつつあると思われる。というのは、女性のライフサイクル(図-1)や平均寿命、意識、価値観などの変化により結婚に対する考え方も変容を遂げ、多様化を果たしているからである。このような現代女性の考え方の変化が、都市部を含め本土から嫁いでくる多くの女性を離島にもたらし、その結果離島自身も変化を遂げ、今後変わっていくのではないだろうか。

また、離島が変化していく際の離島振興策としては、これまであまり取り上げることのなかった、離島移住者や嫁いできた女性の立場を考慮したものを推し進めていく必要があるのではないだろうか。それは例えば、島外から来た者を孤立させない環境づくりであったり、子どもの教育・福祉面などの不安を取り除くというようなソフト面からの支援

態勢が一つにあげられる。

そこで、本論文では都市部に居住する女性を対象にアンケート調査をおこない、離島・仕事・教育・福祉・結婚などに関してどのような意識を持っているのかを総合的にみていくことにする。加えて、都市部女性のアンケート結果と、実際に離島に嫁いだ女性によるアンケート調査やインタビューに基づいた結果とを比較・分析する。

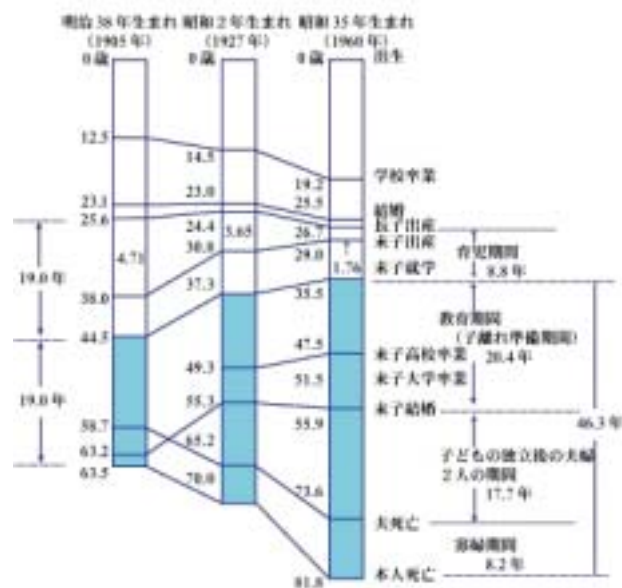
(表-1)

離島地域(1995)における人口推移

	離島人口	対前5年比	全国人口	対前5年比
1960	1,017,624		94,301,623	
1965	911,075	-10.50%	99,209,137	5.20%
1970	792,563	-13.00%	104,665,171	5.50%
1975	719,973	-9.20%	111,939,643	7.00%
1980	680,372	-5.50%	117,060,396	4.60%
1985	644,856	-5.20%	121,048,923	3.40%
1990	588,781	-8.70%	123,611,167	2.10%
1995	548,265	-6.90%	125,570,246	1.60%

(国土庁調査より)

(図-1)女性のライフサイクルの変化



(北九州市市民局「北九州市の女性に関する実態調査」より)

第1章 離島とはなにか？

島の定義をめぐっては、1960年代を中心にさまざまな議論がなされている。山階芳正は、島の定義を「島嶼(とうしょ)とは水圏を以って周囲を完全に囲まれ、かつ相対的に面積の狭小なる陸がいである。(=自然的概念)」とし(山階1951)、大村肇は、島の定義を「自然的客観条件により認められ、Mainland - 水圏 - 島地という一連の秩序的関係において把握されなければならない。」、離島の定義を「Mainlandに二次的に結びつく島々(=主島にたいする属島)。」としている(大村1959)。また、宮本常一は、島の定義を「四周を海にめぐらされて、地域的にはある独立性を持ちつつ、社会経済的には本土へ何らかの形で従属的に結びつかなければならない運命を持った世界。」とし、河地貫一は、島の定義を「自然的概念」、離島の定義を「本土に対する概念であって、資本を有するものが、本土、それに従属するのが離島であり、両者は海によって隔絶される。」としている(河内1968)。

一方、国の側では、離島振興法1)(昭和28年法律第72号)に関連して、一定の基準を満たした場合離島指定

2)をおこなうが、離島についての明確な定義は存在しない³⁾。このように、島、島嶼、離島に関して必ずしも明確な定義はおこなわれていない⁴⁾。

こうした議論の中で一般論としての離島の研究が可能であるかという疑問が残るのだが、離島振興法により指定された「離島」(法指定離島)は現実に存在することから、「離島」研究は可能であると考えられる(山内1997)。

1)離島振興法(昭和28年法律第72号)は10年間の時限立法として制定され、度重なる一部改正を通じ、4度にわたる期限延長がなされてきた。現在は平成4年に新しく改正され、平成15年までの延長が認められている。尚、奄美、小笠原、沖縄についてはそれぞれ「奄美群島振興開発特別措置法」(昭和29年法律第189号)、「小笠原諸島振興開発特別措置法」(昭和44年法律第79号)、「沖縄振興開発特別措置法」(昭和46年法律第131号)がある。

2)離島振興対策審議会が内規として定めたもので、外界離島指定基準、内海離島指定基準、離島一部指定基準がある。なお架橋等により本土と陸続きになった場合は指定を解除される(指定解除基準も同様に内規として定められている)。これらの基準は昭和30年代のものであり、現状を反映した基準とは言いがたい。離島振興法による指定を受けているのは平成7年度12月現在で326島であり(奄美、小笠原、沖縄を含む、法指定離島)、有人島全体では429島、無人島は6418島となっている。

3)離島の特徴として、本土より隔絶される特殊事情からくる「後進性」(離島振興法第1条)、「環海性」、「狭小性」、「隔絶性」がいわれている。

4)1971年度秋季地理学会のシンポジウム「離島」でも議論されているが、明確な答えは得られていない。

第2章 調査対象離島について

2-1 調査対象離島の選定

住民が自分たちの離島の生活や環境のこと全般を十分把握できる規模であることが、生活環境について、またはその環境下における住民の意識、心情に関するデータをより高い信頼性を持って確保できるのではないかと思われた。このことを考慮した上、調査対象として福岡県宗像郡大島村(以下、大島)を選定した。

2-2 大島の紹介

位置 福岡県は九州地方の北東端に位置し、北東は関門海峡を挟んで山口県と相対し、北は響灘・玄界灘を隔てて朝鮮半島と相対している。宗像市に属する大島は、その玄海灘に浮かぶ離島である(図-2)。さらに大島から北方48キロの海上に、大島に属する沖ノ島がある。なお大島は、日本と大陸との接点として、「筑前大島」という呼び名で知られ古代から重要な位置を占めている。

大島への定期航路は、宗像市玄海町神湊から大島村営の1日7往復(日祝のみ往復)定期便がある。航程約20分、距離にして約7キロである。その他の交通手段として、漁師個人が所有している船を利用し、本土へ渡ることもできる。

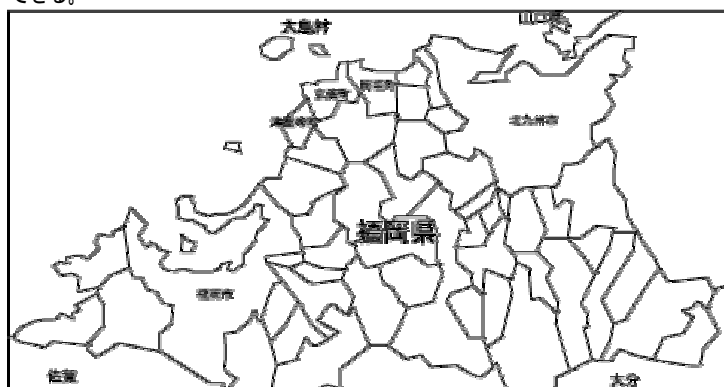


図-2 大島位置図

地形と面積 島は中央部の標高217メートルの御岳山を中心に山岳部が多く平地が少ない。東西にひょうたんの形をしており、面積は8.2平方キロ、東西に3.2キロ、南北に2.7キロである。

行政区分 行政区画は古くから、村行政を推進するために集落を六区画としており、島の東端から宮崎区、東区、堂ノ前区、谷区、町区、西区と連なって並んでいる。

人口動態 大正9年ころには総人口2000人を超えたこともあったが、村の生活が主として漁業に依存している関係で、漁業による生活にも限界があり、江戸時代から今日まで、世帯数も人口も生活できる範囲内で自然に調整されてきた(「大島村史」より)。平成10年度3月31日現在、世帯数は376世帯、人口は989人である(表-2)。年

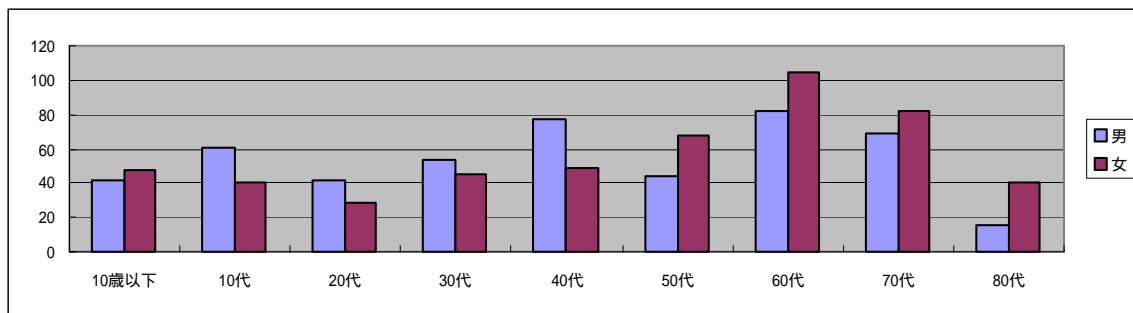
年齢人口構成(図-3)を見てみると、全人口の約30.03%を60代以上の男女が占めており、今後ますます高齢者人口が増加していくと予想される。

表-2 大島の人口及び世帯数 (平成10年3月31日現在)
人口(人)

男	女	計	世帯数
485	504	989	376

(住民基本台帳年報)

図-3 年齢別人口構成



	10歳以下	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代
男	42	61	42	53	77	44	82	69	15
女	48	40	28	45	49	68	104	82	40

(住民基本台帳年報)

主要産業 昔から漁業が主要産業であり、漁期は大きく2つに分かれている。5～12月は漁協を中心とした巻網漁²⁾がおこなわれ、60歳未満の漁協組合員は全員参加が義務づけられている。女性は海女漁に従事し、期間は6月下旬から10月までである。その他の60歳以上の男性を中心とした一本釣りもおこなわれている(漁業関係者の話より)。

農業では、ミカンやしいたけの生産を主としているが(大島村史より)、農家の家庭が年々減少傾向にあり、各個人で自分たちの分を作っている家庭が目立つ。大島には江戸時代後期から牧場があり、足腰の強い「大島牛」の名で知られている。昭和45年に村営牧場が開始され、現在約300頭の牛が飼育されており、年末になると村民一人あたり200グラムを「正月用」として例年、各家庭に配られている。また、将来的には「大島黒牛」のブランド化を目指しており、島外の人々に大島黒牛を堪能してもらおうと、パーベキュー大会などのイベントが実施されている。

1) 刺網漁: 前日の夕方に網(海中に浮きと錘とで帯状に張り、魚を網目にかからせてとる網)をしかけ、夜明け前に網を上げ、港で網から魚をはずす。網から魚をはずす作業は手間がかかり、一日仕事になるので、港にて漁師の家族(両親、妻)、近隣の人々で作業をおこなう。対象魚種は、ヒラメやカレイが中心。

2) 巻網漁: 船団を組んでおこなわれ、魚群を網で取り巻きその囲みを狭めて捕る漁法。操業は夜間におこなわれる。対象魚種は、イサキ、サバ、アジ、ブリ、タイなどが中心。(漁業関係者からの話より)

その他の島の特徴

・同年寄り: 同年齢の人々が集まって交流を深めるための役割を果たす寄り合いのこと。年齢によっては、同年寄りに名前をつけているところがあったり(ex タンポポ会)、家族ぐるみで参加していたり、旅行へいくところや食事会をおこなうところもある。年齢ごとに内容や回数はさまざまである。

・オフトークの設置: 大島の各家庭ごとに設置されてある、村内専用放送機器。役場により、朝6時30分、昼11時30分、夜8時の1日3回毎日放送される。放送内容は、大島でおこなわれる行事予定、連絡、政治報告などが主に放送されている。電気代は毎月500円で、その他の取り付け、本体費用は役場が負担している。機能としては放送のほかに、1)スピーカーの電源、2)放送を繰り返して聞くりPEAT機能、3)緊急用ボタン(緊急の場合にボタンを押すと、役場につながる機能を持つ)、などがある。オフトークの設置により、ラジオやテレビのない家庭でも毎日情報収集、また緊急時の迅速な連絡が可能となり、村民の生活の中で大きな役割を果たしている。

・施錠をおこなわない習慣：自転車、車のほか、家の玄関(ただし若い女性のいる家庭を除く)も夜でも施錠をせずに網戸のままにしてある。自転車などは盗まれてもすぐに見つかるし、家には盗まれるものがなく、入られて困るのは野良猫くらい。鍵をかけることが第一面倒くさいという。逆に施錠した場合のほうが鍵穴がさびてあったりとか、鍵を開けることになれていないため、鍵をかけたはいいものの、あけるときには一人であけることができずに困ったりすることもあるという。最近では、警察が防犯のために施錠を習慣づけるようにと放送で呼びかけているが、依然として施錠しない習慣が続いている。

二月	中津宮節分際
四月	中津宮春季大祭
五月	沖ノ島現地大祭
七月	大島祇園祭
八月	夏の思い出、楽しい一日 in 大島
	七夕祭り、盆踊り大会、花火大会
九月	運動会
十月	みあれ祭、健康祭り
十一月	しおかぜマラソン

(welcome to ohshima パンフレットより)

・まつり、イベントの多さ：歴史の島、大島は当然祭りも多彩である。壮大な祭りから、大島独自の素朴な祭りまで、年間を通して様々な祭りがおこなわれている。その他多くのイベントもおこなわれており、島内は常ににぎやかな雰囲気を持っている。私が大島に訪ねた時分にも、ちょうど「健康祭り」で健康診断、体力テスト、豪華商品くじ引き大会、綿菓子・やきそば・ポップコーンの食べ放題のイベントがおこなわれており、これらすべてが村民の手でなされ、村民全体が楽しんでいる風景は手作りの暖かさが感じられた。

・ごみ処理の徹底：土・日以外毎日ごみ収集がおこなわれており、回収後は島内に設置されてあるごみ焼却場で処理される。ごみ置き場は指定時間以外は施錠され、容器などは中身を洗ってから細かく分別するという徹底ぶりである。また海に続く河口付近の住民らは、魚の骨や内臓など自然にかえすことのできるものは、自分たちで処理することでごみのダイエツ化に努めており、島の自然や環境は自分たちの手で守っていかうとする意識がうかがえる。

・食べ物、食材の分け合い：先にも述べたように、各家庭で規模は様々だが、畑を耕している家庭、漁業の家庭が多く、野菜や魚介類または調理されたものを近隣同士で分け合っている。しかも量が半端ではなく、もらったものをまたほかの家庭に持っていく具合である。ほかには旅館や民宿でお客用にこしらえたご飯や料理のあまりものを、近隣の人を招いて振舞ったり、待って帰ってもらったりしている。この習慣により、誰もがその日の食べ物に困らないのもちろんのこと、このような日々のやり取りで、相互扶助の精神や地域における人間関係の形勢が培われているといえる。近隣の九州本土では、こうしたコミュニケーション方法はあまり見られない。

第3章 研究方法

3 - 1 調査方法

本論文では、本土の女性が離島に対し何を求めており、何を不安に感じているのか、また教育・福祉・仕事面ではどのような意向を持っているのかを明らかにしていくため、アンケートによる意識調査をおこなった。

それに並行して、実際に大島に居住している女性や本土から嫁いできた女性の現状はどのようなものであるかを把握することにした。そのための基礎資料を得るために、大島居住の女性に対しアンケートによる意識調査をおこなった。

アンケートでは、選択式の質問方法を用いているのであるが、これは対象地域の性格上、事前に回答を予想し適切な選択肢を設定するルことに限界があり、かつ個別性に欠けているのではないかと疑念が残る。

そこでアンケートは、全体の傾向を把握するための資料とし、これを補うものとして個別性や個人の意見を重視したインタビューをおこなった。これをもって個別の詳細な意識調査とし、事例として述べていきたい。

以上2つの調査結果を総括し、本土で生活する女性の意識と大島に居住する女性または離島に嫁いだ女性の意識や現状との比較、分析をおこなった。

3 - 2 調査概要

1)(本土におけるアンケート調査)

調査対象地には、様々な属性の被験者がいると考えられる小倉駅周辺の街頭を選定し、10代後半から20代後半の女性に対し、カテゴリー選択式と自由記述式とを用いてアンケート調査をおこなった。

調査は、通行人から無作為に対象者を選出し、調査の主旨を説明した上でアンケート用紙を配布した。そして回答終了後に、その場で回収するという方法をとった。

2) (離島におけるインタビュー)

対象者には主に本土から離島に嫁いで来た女性とそうした女性を妻に持つ男性に、訪問または偶然知り合い、家や道端などで世間話なども交えながら自由に語ってもらった。会話の録音のためにテープレコーダーを用意していたが、結局3人にしか用いることができずにその他は、対象者が述べていたことを漏らさないように努めながらメモをとった。また時には参考資料として、対象者所有のアルバムや日記、趣味なども見せていただいた。

3) (離島におけるアンケート調査)

調査は、対象者を訪問して主旨を説明したうえで依頼し、後日回収する訪問留置法によりおこなった。場合により(例えば対象者が高齢者の方、目の不自由な方、お忙しい方など)、私が質問をその場で読み上げ、それに対して口頭で回答してもらう方法も用いた。

対象者は大島に居住する20歳以上の女性であり回答方式はカテゴリー選択式により行った。

表 - 3 調査概要

4 - 1 回答者の属性について

表 - A

対象年齢

	18歳	19歳	20歳	21歳	22歳	23歳	24歳	25歳	26歳	27歳	28歳	29歳	計
人数	4	5	16	8	5	4	8	3	1	3	0	3	60

住居

	一人暮らし	家族と同居	恋人と同居	その他
人数	18	41	1	0

出身地

	北九州市市内	北九州市以外の福岡県内	福岡県以外の九州	その他
人数	33	8	11	8

職業

	会社員	公務員	管理者・経営者	商工自営業	農林漁業	自由業	自営手伝い
人数	24	3	0	0	0	1	1

パート・アルバイト	内職	大学(院)生	短大・専門学校生	無職	その他の職業
7	0	14	3	1	6

兄弟関係

	弟一人	姉一人	兄一人	妹一人	一人子	妹二人	兄姉一人	兄妹一人
人数	12	10	10	9	7	3	2	2

兄二人以上	姉弟複数	兄姉一人	姉妹一人	姉弟一人
1	1	1	1	1

アンケートを依頼した回答者の中から有効な回答を得られたものは60で、これらの回答者の属性を以下の表-Aに示すことにする。対象年齢は10代後半から20代後半であるが、10代後半と20代前半に偏りが生じてしまった。職業については、会社員、公務員が全体の約45%を占めており、回答者は離島の環境と相反する都市環境下に属していることがわかる。

4 - 2 離島出身男性との出会いに関する分析

表 - B

a) 来月、離島の方々とのお見合いパーティーが小倉で予定されているとします。

1. ぜひ参加したい	2. 参加したい	3. どうでもいい	4. あまり参加したくない
1	12	29	11

5. 絶対参加したくない	無回答
7	0

b) あなたはお見合いをしますとします。お見合い途中で、相手が離島出身者だとわかった場合、あなたはどう思われますか。

1. とてもいい	2. いい	3. なんとも思わない	4. 少しいや	5. 絶対いや	無回答
0	11	27	19	3	0

c) あなたの恋人があなたに「僕は離島出身者なんだ。島にお嫁にきてください！」といわれた場合、承諾しますか。

1. 積極的に承諾	2. 消極的に承諾	3. 何とも言えない	4. 消極的に承諾しない
12	14	25	5

5. 積極的に承諾しない	無回答
3	1

表 - C あなたは結婚を考える際に、何が大切(基準)だと思われませんか。(複数回答可)

性格	愛	価値観	お金	センス	職業	容姿	人種	親の意見	学歴
50	37	37	36	43	12	10	5	5	3

社会的地位	家柄	宗教	出身地	無回答	その他(いかに息苦しくない存在か、自分をほっといてくれるか、セックス、健康)
4	2	2	0	3	

表 - B にあるように3段階に分けた場面設定において、相手男性が離島出身者であることを回答者が認識した場合、それぞれの場面でそのような反応を示すのかを見てみることにした。

総合してみると、3つのタイプに分別することができた。1つ目のタイプは、a) ~ c) いずれの場面においても「選択肢3」を選択している回答者である(48.3%)。このタイプは、離島出身男性との出会いについて、どのような場面設定においても自分自身のことに置き換えてのイメージが想起されにくく、それはつまり離島出身者・お見合い自体に興味を示していないことに結びつく。

2つ目のタイプは、a) ~ b) において消極的・やや消極的の回答をしているタイプである(消極的・やや消極的な回答1と2をあわせて a) = 30%、 b) = 36.7%)。このタイプは a), b) どちらの場面においても消極的な態度をとっており、離島男性・お見合いを否定的に認識している傾向が読み取れる。

3つ目のタイプは a), b) において積極的な回答をしているタイプである(積極的・やや積極的な回答1と2をあわせて a) = 21.7%、 b) = 18.3%)。このタイプは、2つ目のタイプとは逆に離島男性・お見合いに対し肯定的に認識し、興味を示していることがわかる。

c) については a) b) に比べ、積極的・やや積極的な回答があわせて43.3%と多く積極的かつ好意的な態度がうかがわれた。このことから、c) の「すでに恋人関係となった後に、相手が離島出身者であることをはじめて認識した場合」については、相手が離島出身者であるか否かは女性側にとって問題視されていないことがわかる。さらに表 - C より、結婚を決定する場合の要素として相手の出身地を考慮すると答えた女性は3.33%とごく少数であることから、自分の結婚相手として交際する男性の出身地(本論では離島)は問題とされていないことが明らかとなった。

4 - 3 離島に対する期待感、求めていることに関する分析

表 - D あなたが離島に嫁いだ場合、島の生活について何を期待しますか。()内に記入してください。(自由回答、複数可)

(生活環境について): 計 22 人

食べ物がおいしい、新鮮	10	安心安定した生活、犯罪が少ない	3
豊かな暮らし	3	子どもを育てる環境に良い	2
いろいろな面で初体験できる	1	物価が安い	1
ただで食材が手に入る	1	そこでしかできない体験ができる	1

(自然環境について):計 15 人

自然に多く触れられる	9	海、自然の美しさ	3
自然と戯れる	1	自然との共存	1

(人間関係について):計 12 人

人間関係の暖かさ	6	新しい人間環境づくり、出会い	1
協力し合える関係	1	家族的関係の構築	1
島の人々との積極的交流	1	近所づきあいの親密さ	1
人々がやさしい	1		

(精神的なことについて):計 12 人

のんびりできる	8	こころが安らぐ	2
開放的	1	しみじみできる	1

(その他):計 14 人

特にない	10	そのときの気持ち次第	1
交通が便利	1	あまり期待できない	1
わからない	1		

(無回答):計 10 人

表 - E あなたの離島への印象をお答えください。(複数回答可)

自然が豊か	不便	あたたかい	さみしい	開放的	つまらない	閉鎖的	安全	豊か
48	42	25	25	17	15	11	9	8
明るい	楽しい	にぎやか	暗い	人工的	不衛生	その他	衛生的	便利
6	6	3	3	1	1	1	0	0
冷たい	貧しい	危険						
0	0	0						

回答者に離島に嫁いだ場合を仮定してもらい、島の生活において何に期待感を抱くのを可を自由回答式で質問したところ、回答の内容別に5つ(生活環境について・人間関係について・精神的なことについて・その他)に分類することができた(表 - D)。

中でも離島において毎日の生活を営まなくてはならないことから、生活環境についての回答が36.7%と多かったが、それを上回って人間関係・精神的なことについての期待が全体の約40%を占めていることは注目に値する。人間関係・精神的なことについては、自由回答のなかで「親密」や「のんびり」といった表現が目立つことから、両者において人間の温かさやそこから導かれる心の安らぎなどを離島(住民)に対して求めていることがわかった。

反面、「あまり期待できない」・「特に期待することはない」・無回答なども目立ったことから、島のイメージ(表 - E)に含まれていたり上のように期待として上げられた人間関係の親密さやあたたかさなどを、逆に好まない傾向も一方ではみうけられた。

4 - 4 離島に対する不安・ストレス要因に関する分析

表 - F あなたが離島に嫁いだ場合、島の生活について何が不安ですか。()内に記入してください。(自由回答、複数可)

(生活環境について):計 58 人

買い物に困る	10	余暇の過ごし方、娯楽、楽しみがない	8
なにかと不便ことが多い	7	福祉、医療の充実	7
身内、友人にすぐにあえない	7	交通手段の少なさ	7
周りに何も無い	2	学校・仕事場の有無	2
島の慣習の厳しさ	1	教育の遅れ	1
閉鎖的	1	安全性	1
情報源の少なさ	1	行動範囲が狭まる	1
(気を使い)実家に帰りにくい	1	自分にとって快適か	1

(人間関係について):計 13 人

友人ができない(孤立)	3	近所付き合い、地域参加のわずらわしさ	3
人間関係が狭くなる	2	いじめにあいそう	1
話題が合わない	1	周囲の人はやさしいのか	1
相手の親との関係	1	なにかあったら島中にすぐに知れ渡ること	1

(精神的なことについて):計 6 人

さみしい	2	自分が田舎くさくなる	2
退屈	1		

(自然環境について):計 4 人

自然災害	4
------	---

(その他):計 2 人

特になし	2
------	---

(無回答):計 1 人

表 - G あなたは人間関係においてどのような関係を築きたいと思われますか。

(a)	(b)		
深く広く	30	集団で常に団結	4
深く狭く	16	出来れば団結	26
どうでもよい	1	どうでもよい	5
浅く狭く	2	他人と一定の距離を保つ	17
浅く広く	9	常に孤立していたい	0
その他(一部深く)	1	無回答	8
無回答	1		

4 - 3同様、自由回答式で答えてもらい回答を内容ごとに分類した結果、9割を超える回答者が不安・ストレス要因において、生活環境における不便さを挙げていた(表 - F)。さらに表 - Eにおいても「不便な印象である」と答えた回答者が70%と多かったことから、本土と隔絶されているがゆえに生じる離島の特徴をイメージとして定着させていると思われる。

また、人間関係の面では「友人が出来ない(孤立してしまう)」「近隣、地域活動において人間関係がうまくいか、わずらわしくないか」などがあげられた。このことから回答者の意識がいかのように二分されることがわかる。一方は、4 - 3の期待感の箇所人間関係の温かさや安らぎを求めた回答者が同時に、上にあげたような「自分だけ孤立し

てしまうのではないだろうか。」といった不安や悩みを抱いているという傾向である。またもう一方では、4 - 3においての人間関係の親密さや温かさを好まない傾向にあり、それに加えて表 - Gで「他人と一定距離を保った関係を築きたい(28.3%)」と回答した回答者が、「付き合いのわずらわしさを感じずに、暮らしていけるか。」という、前者とは異なる不安を抱いていることがわかる。

よって「人間関係がうまくいくか」という回答は、「離島住民が温かく迎えてくれて、自分も仲間には入れるのか。」というタイプと、「人間関係をわずらわしいと思わずに離島生活を送っていけるのか。」というタイプといて具合に、不安要素タイプを分類させることが出来る。

4 - 5 離島における結婚後の就業(継続)希望に関する分析

表 - H 離島に嫁いだ場合、現在の仕事はどうしますか。(学生、無職の方は仕事についている場合と仮定してお答えください。)また離婚する場合は離島で就業希望がありますか。

専業主婦	20	育児が落ち着いた後、島で仕事を探す	12
通勤可能ならば続ける	11	育児が落ち着いた後、本土で仕事を探す	4
必ず続ける	5	通勤不可能ならば単身赴任しつづける	3
やめて島で仕事を探す	2	その他(自分で店をはじめ、状況による)	2
無回答	1		

回答者に離島に嫁いだ場合を仮定してもらい、この場合に現在の仕事をどうするのか、また退職する場合は離島において就業希望があるのかたずねてみることにした。なお学生または、無職の回答者には、現在何らかの職についていると仮定して答えてもらった。(表 - H)

その結果、「専業主婦になる」と答えた回答者が全体の三分の一で最も多く、就業における責任義務や仕事から解放される専業主婦となって、のんびりと暮らしたいという意向を持つ回答者や、離島の適当な職場が少ない環境条件を認識して専業主婦を選択した回答者が存在したことが、推測できる後者の場合は、離島で職場を見つけることが困難なため、否応無しに専業主婦を選択しているというニュアンスを含んでいると考えられるので、今後島全体での女性のための職場確保やサポート態勢が重要となってくると思われる。

このことは、次に多かった「育児が落ち着いた後で仕事を探す(20%)」についても言えることである。

4 - 6 教育環境に対する分析

表 - I 将来あなたが子どもを持つと仮定して、そのような環境のもとで育てたいですか。a)、 b)それぞれの()内に下記の選択肢から選んで番号を記入してください。(同じ番号、複数回答可)

・幼少までは(a.)な環境のもとで、ある程度大きくなったら(なっても)(b.)な環境のもとで育てたい。

	自然豊富	生活、居住機能が高度	情報豊富	文化振興型	伝統産業振興型
(a)	51	9	7	2	0
(b)	19	16	25	3	2

	観光・レクリエーション型	無回答
(a)	0	1
(b)	1	2

回答者に将来子どもを持つと仮定してもらい、現在どのような環境のもと、育てていきたいと思っているのかをたずねてみることにした。その際子ども成長過程に従い、育てていきたいと思う環境も変化するのではないかと考えられ、a)幼少時において、b)ある程度大きくなり親の手から離れる時期においての2段階に分けてそれぞれ答えてもらった(表 - 1)。

すると、a)では「自然が豊富な環境」を上回って「情報豊富な環境」と答えた回答者が41.7%と最も多くなっている。これらのことから情報化・競争社会という現代の社会背景の枠組みの中で、わが子が生き抜いていくためには、b)の時期から情報豊かな環境のもと、社会への適応能力を培ってほしいという強い願いが込められていると読み取れる。しかし a)の時期では自然の中でのびのびと育ててほしいという意向が積極的に含まれているという推察も出来る。

その他に(b)の時期では、「情報豊富な環境」について「自然が豊富な環境(31.7%)」、「生活居住機能が高度な環境(26.7%)」と多く、このことから教育環境に対する女性の意識が分散していることがわかる。

4 - 7 介護問題に関する分析

表 - J 将来、両親の世話をどうしたいと思われませんか。(複数回答可)

自分が世話する	23	施設に頼む	3
兄弟で世話する	23	興味ない	2
親はいつまでも自活できると思う	13	その他(状況による、 すでに介護者が決定している)	2
福祉、介護サービス 制度の利用	12	近所と協力	0

介護問題についてどのような対処をしていこうという意向を持ち、介護問題に直面した場合に、他者とのかわりをどのように持とうとしているのかを尋ねるため、回答者の両親が介護が必要となった場合に置き換えて答えてもらった。(表 - J) 「自分が世話する」「兄弟が世話する」(あわせて69.7%)と血縁者だけで対処していこうとする傾向が強く、他者や地域コミュニティへの依存度が低いと思われる。これらについて、「親はいつまでも自活できると思う」と答えた回答者が多く、「興味がない」とあわせると25%を占めており、介護と自分とのかわりについて関心が低いことがわかる。

その他、「施設に頼む」と答えた回答者が5%で詳細はこうである。1)両親が子どもに世話されるのを嫌う 2)同居できない場合、独居生活より施設で共同生活を送るほうがさみしい思いをしない 3)親が施設への入所を希望している などが挙げられ、回答者本位の回答ではなく、両親への配慮からくるものだということがわかる。

第5章 離島におけるインタビュー

インタビューの内容を報告するにあたり、協力していただいた方の中で名前を伏せてほしいという方がいらっしゃったので、すべての方の名前をアルファベット1字で記すことにする。

・ Aさん (41)

1)	職業	公務員の臨時職員
2)	旦那さんの職業	役場の公務員
3)	同年の人数	2, 3人
4)	兄弟関係	不明
5)	出身	長崎の壱岐
6)	結婚前の職業	北九州市内のスーパー
7)	家族構成	夫の父母、夫の姉、夫、長女(中1) 次女(小4)、三女(保育園年長)、本人

(夫との出会い)

Aさんが先にスーパーにて勤務していたところに1年後、同スーパーに旦那さん(大学卒業後)が就職したことが出会いのきっかけとなる。

旦那さんはスーパーにて2年間勤務した後に、大島に戻って役場の公務員となる。理由は夫は長男であり、母親の体が弱いため早めに帰郷をしなければならなかった。

夫が大島に戻ったのを機に、彼女も壱岐に戻り遠距離恋愛をスタート。博多港でよく落ち合っていた。

交際は7年間続き、その間彼女の親に結婚を反対され続けたが、親のほうがついに根負けして1986年3月、晴れて結婚することが出来た。現在では、結婚してよかったと両親も言っている。

(結婚後の仕事について)

結婚後はすぐに大島に来て、専業主婦に。本当はなにか仕事をやりたかった。しかし、島には仕事が少ないし、子どもが大きくなるまでは親がついていたほうが良いと思い、仕事にはつかなかった。祖父母に子どもを預かってもらうと、「お金で育つ」と同じになるし、おじいちゃん、おばあちゃん子になってしまうから自分で育てようと思った。

今年下の子が幼稚園の年長組みになったので、7月嫁いできてはじめて島のなかで臨時職員として働くようにな

った。

(島にきての印象)

すぐに友人が出来てしまうところだなあと思った。同年の人がみんな良い人。同年寄りの際に自分の歓迎会を開いてくれたりしてすぐに打ち解けることが出来た。また、もとバスケットボール部で球技が得意なほうだったこともあり、誘われてはいると友人がさらにたくさん出来た。

(どのくらいで島に慣れたか)

一番上の子が小学校に入ったところから。しかし、実は今もなれたのか慣れてないのかよくわからない。慣れていないかもしれない……………。

(島の生活に慣れていない点)

婦人会に入っているが、積極的に離れない。婦人会には様々な年齢層の女性が参加しているから、ものの考え方などが違うと思う。

(島におけるよいところ)

みんなが協力的な雰囲気なところ。子どもが保育園に入園したところから、特にそう思うようになった。たとえばPTA行事など、みんな積極的に参加して助け合っているところなど。

(島におけるよくないところ)

特にうわさがこわい。

(同年寄りについて)

毎年1年に1度行われ、旅館で食事や会話を楽しむのが主。

(プライバシーの問題について)

あまり気にしたことがない。

(ストレスについて)

大島の人には知っている人ばかりだから、気を使う。正直な気持ち、よその空気に触れたいと思うときもある。そんなときは子どもが学校に行っている間に、本土に買い物にいった息抜きをしている。

(将来について)

今後も大島にて生活すると思う。子どものことについては、子どもの意志に任せたい。たとえ、大島に戻ってこなくてもそれはそれで良いと思う。

・ Bさん (43)

1)	職業	公務員
2)	旦那さんの職業	漁師
3)	同年の人数	4人
4)	兄弟関係	男2人、女2人
5)	出身	20まで姪浜、その後福岡市早良区
6)	家族構成	夫の父母、夫の弟、夫、長男(高1) 長女(中1)、本人

(夫との出会い)

仲人の知人を紹介してもらい、お見合いをしたことがきっかけで知り合った。3回のデートを重ねた後に、半年後の1981年5月に結婚し、大島に嫁いできた。それまでは、大島がどこにあるのかも知らず、地図で調べてみてはじめて位置を知った。

(結婚後の仕事について)

大島にどこか勤め先があれば、結婚後も就職したかったが、適当な就職先が見つからなかったので専業主婦に。夫の漁の手伝いは(ごみ・海草取り、網取りなども)一切行わなかった。というのは、旦那さんが子どものころに両親が漁に出ており、不在であったことでさみしい思いをした経験から、自分の子どもには同じ経験をさせたくないという思いがあったからである。しかも、結婚当初は網漁を行っており、漁は夫の両親、夫、夫の4人の弟とで行っていたので、人手は足りていた。このようなことから自分は、専業主婦として家事と子育てのみに専念しておけばよかった。

その後、両親が漁をやめ、兄弟もばらばらになったのを機に夫は個人で漁をするようになった。その際も夫からは「一本釣りだし、自分一人で出来るから手伝いは良い。」といわれたし、自分からも船にのろうとはしなかった。

ほかの家庭ではこうはいかず、これまで漁を手伝ったことのないお嫁さんでも、夫とともに漁に出ていたお姑さんの体調が悪くなったとき、少し手伝ったとたんにずっと手伝わなければならなくなるところもあるので大変だと思う。

資料館が出来たのが平成5年。職員の求人を見つけたので、お姑に働きたいと相談して許しを得た後、面接に受かって働き始めた。通常は、8:30~17:00までの勤務で、月曜日が休日。休日の日は家事を自分一人でやるようにしている。

(島にきての印象)

「静かなところやなあ。」というのが一番。当時は本土と大島の行き来には、弁天丸という客船だけだったので車の乗り入れもなく、海も岩場ばかりで大変静かだった。その後、弁天丸からフェリーに変わり、車の乗り入れが可能になり、車が多くなったと思う。

(どのくらいで島に慣れたか)

年に1回同年寄りがあるので、そこで友人が出来たし、交流が深まった。特に子どもが小学校に入ると、子どもを通して親同士も仲良くするようになり友人がより増えたり、行事関連などで役に入ると(役員になると)何度も集まりごとがあるので、顔を合わせていくうちに仲良くなっていった。

(島における良いところ)

学校行事の役員決めするときなどみんな協力的で、自分から積極的にかつてでる点は良い。たとえば、「今年は中学校の役員をしとるけ、小学校は来年に役員をするけね。」といった具合に、もめあうことなくテキパキと先の先のことで決まってしまう。街において、みんなが嫌々役員を引き受けている場合と違って雰囲気が良いと思う。

また自然が美しく、子どもを育てるには良いところ。しかも1クラスに少ないとき(現在の高校2年生)で、6,7人のころもあり、幼稚園のころから小人数でいっしょに成長してきたことから、家族のようにみんな仲がいい。いつも自然に囲まれてのびのびと育ってきたので、大きないじめもみられなかった。

ただ、これまでの人間関係で狭く深かっただけに、高校に入学して島の外に出てからの人間関係がうまくやっつけられるかどうか心配だった。しかし、すぐに新しい人間関係を築き、打ち解けることが出来たので心配には及ばなかった。

(島における良くないこと)

「なんて不便なんだろう!」と思ったことは、今も昔も変わらない。一つ目に、交通手段の不便さは強く感じている。特に昔はひどく、結婚当時の神湊から船の出る最終の時間が、夏で18:30、冬で16:00から17:00と早かったことが、遠出をする場合につらかった。

だから島外に出かける場合、スケジュールをすべて船とバスの時間に間に合わせないといけないし、船、バスの時間を常に頭にいれておかないといけないので、外へ行ってもつい帰りのことが心配になってしまう。

台風で3日も船が欠航になったときもひどかった。というのも、島を出ることが出来ないのはもちろんのこと、島に品物が入ってこなくて、生活する上で大変不便だった。その他、例えば新聞は3日後にやっと配られたはいいが、3日分の朝、夕刊まとめて6部持ってこられたときは困った。これらの事柄から、大島に嫁いできてからは、前より台風情報や風速情報に敏感になったと思う。

二つ目に、特に大きな病気や怪我をしたときなどが島に専門病院がなくて不便であると同じに、不安が伴っているということである。「御岳」という高速船を救急で出してくれるそうだが、やはり心配。

三つ目に、約20年の間スーパーに行けばなんでも手に入る生活に慣れ親しんできたので、島では何でもすぐに手に入るとは限らないところが生活づらい。

(今の現状について)

大島全体のことを言えば、だいが、若い人たちが帰ってきたと思うその人たちが、役場の職員や漁師、漁協の仕事に従事しているので、がんばって大島の将来を良い方向へ持って行ってほしい。

(将来について)

島を出られるものなら早く出て行きたいが、たぶんずっと永住するつもり。大島の将来についての要望は、本土と橋でつながってほしいということ。橋がかかれば、遠出していても日帰りで帰れるし、深夜になっても帰ってこれるから便利になると思う。

(子どもの将来について)

将来は子どものしたいようにさせるつもり。漁師は浮き沈みが激しいので今後は難しく、漁師だけでは生活がやっていけないと思う。もし、そうしても子どもが漁師になりたいというなら応援する。

・Cさん (44)

1)	職業	専業主婦
2)	旦那さんの職業	漁師
3)	同年の人数	不明
4)	兄弟関係	姉、兄
5)	出身	篠栗
6)	家族構成	夫の父母、夫、長男(高2) 次男(中3)、本人

(結婚前の職業)

専門学校(1年間)を卒業後、博多の銀行に19~26歳まで勤務していた。機会の温度調整というコンピューターに囲まれた機械的で無機質な生活の繰り返しが嫌気がさしていた。

(夫との出会い)

知人に紹介してもらい、お見合いで知り合う。お見合いの際に、「三度の食事さえ作ってくれば、漁業の手伝いはしなくて良い。」とってくれたし、「離島の漁師」という響きに興味と珍しさが伴って、とっても新鮮な気持ちになった。

両親は相手が大島の漁師であることに抵抗があったし、叔父も「サラリーマンの親に育った子が、何で漁師の家に嫁に行かんといけんの化。」と反対だったのだが、その後約2回ほど大島は遊びに行き、その半年後(昭和56年)に結婚を決めた。

(結婚後の仕事)

一年間ほどは役場で働いて、その後はつわり(網についているゴミを取る)などの漁の仕事も手伝うようになった。というのは、「三度の食事さえ作ってくれさえすれば良い。」と夫の両親は言ってくれたものの大島では食事作りは仕事のうちに入らないとされ、仕事をしていない女性は周りから冷たい目で見られてしまうのである。

大島の女性は、昔から「働く女性」が当たり前で、一人前とされてきた。もともと大島にいる女性は、1、2日寝ずに働き通しでも大丈夫だという。だから専業主婦は家事以外に稼業、旅館、農協などでアルバイトや手伝いをしてなにか仕事を見つけないと、「働かないとおかしい。」と周囲に思われてしまう。

(島にきての印象)

朝方5時くらいの空が、ピンク色をしていてとてもきれいな。自然も今よりずっと美しかった。

結婚当初から「オマエ - …。」という具合に、アクセントや言葉遣いが乱暴だったので、よくむっときていた。

(そのくらいで島に慣れたか)

今も自分とは人種が違うと思っているから、慣れたとは思っていない。ものの考え方も、女の人が働き手であり、体を動かしてはならないと考えられているところが独特である。

女性がしてはいけない、またはよくは思われないタブーが存在し、おかしいと思う。1)女性がスナックへ行くことをいやがる。スナックは男性が行く場所と決め付けている。2)朝早くから、女性がほかの家には行くものではない。元日に人の家の玄関をまたぐものではない。これらは縁起を担いでいるらしい。3)大島の女性はみな海に入らない。だから大島に嫁いできて一度も海に入ったことがない。嫁のいる家族は、他人に嫁の肌を見せたくないと思っている。

(島におけるよいところ)

自然が良い。子どもを育てる環境に優れている。最初だけ、人はとつきやすい。

(島におけるよくないところ)

- ・歯科など、専門病院が東郷付近まで船で通わないといけないうので不便。
- ・結婚当初はおいしい魚介類を食べられたが、現実派新鮮な魚は即お金に換えられるため、あまり新鮮ではないものや雑魚ばかり食べなければならなかった。だまされた～。
- ・子どもが高校に入学したら手放さなければならないので、子ども自体のこと、生活費などのお金の工面のことがか心配。
- ・うわさは次の日の朝刊よりも早く島中に伝わるので怖い。悪いうわさが流れると、その家族に「～な家族」というレッテルが張られ、末代まで続くことになるので怖い。

(今の現状)

- ・魚がここ何年も取れない。生活費は何とかなるが、学費など子どもにかかる養育費用のほうが心配。大学の入学金や授業料はどれくらいかかる？
- ・今の若い女性は保母や公務員など、手に職をつけていて島で仕事が探しやすいからうらやましい。
- ・独身男性のことについては、昔ほど困っていないと思う。40代くらいの人にはわからないけど、20～30代の人はどこからか自分で探してくる。今までに集団お見合いが2回あったが、成功はまず望めなかった。女性側には遊びや、冷やかして参加する人が多い。

(将来について)

現状維持がよい。

(子どもの今後)

漁師は見た目よりも不安定。船のうえでも、収入の面でも。だから子どもには大変な思いをさせたくないで、漁師を継げとは決して言わない。子どもの好きなようにさせたい。

(冬～春の生活)

15:00 くらい	網サバ漁の仕掛け開始
16:30	帰宅
2:00	網を外しに行く
4:00～7:00	つわとり(網についているゴミをのける)
	終わり次第、朝食をとりに帰る
	朝食後、網をさばく、たばね直す
11:00	終了。2,3時間休憩
15:00	最初に戻る

・ Dさん(54)

1)	職業	専業主婦
2)	旦那さんの職業	役場の公務員
3)	同年の人数	不明
4)	兄弟関係	兄、弟
5)	出身	父が転勤族だったため、北九州市、柳川下関などを転々とする
6)	家族構成	夫、長女(21)現在アメリカに留学中、本人

(結婚前の職業)

20,21歳のとき、中川町(親の実家)に両親が家建て、その家で祖父母とともに暮らし始めた。その後、父の転勤が決まり両親ともに大阪に引っ越してしまったので、後には新築の家と祖父母、兄弟だけが残った。

そのため、自分が祖父母の世話と弟の弁当作りなどをすべてしなければならなかった。このような生活が6,7年

続いたが、どこにも働きに行かずに家事と家族のことだけをしていれば、おこづかいがもらえたとし、時間もたっぷりあったので、暮らしは良好だった。

父が定年退職した後、中川町にもう一軒父が家を建てたので、最初に建てた家には兄夫婦が住むようになった。新築の家には、両親と弟と自分とが住み、自分は2、3年間を母とともに家事をして送っていた。

(夫との出会い)

自分と夫の父親同士が、箱崎の警察官だったこともあり、夫の父親の誘いで1、2月の寒い時期に、博多でお見合いをしたことがきっかけ。

昭和50年の5月の良い時期に、初めて大島に来て、「にぎやかだし、のどかでいいところだなあ。」と思い、すぐに気に入った。

以前にも何回かお見合いをしたことがあり、その中には警察官の人もいたのだが、頂点に立ち、有名になった自分の父を越える人はいないから、絶対に警察官の人はいやだった。

その他の相手も、職業がいやであったし、性格がのんびりしていた人ばかりだったので、今一つピンとくるものがなかった。父親のように自己中心的で、昔気質、母親に子の父親代わりもさせる男性とは絶対結婚したくないと思っていたのだけれど、今考えると本当は父に似てきびきびとした、厳格な性格の人が好きだったのだと思う。

そんな自分が夫との見合いのときに、夫と仕事先から電話が入り、きびきびと仕事をこなしている夫の姿を目の当たりにして、「(仕事)ができる！」とピンときて気に入った。仕事に対して一生懸命であり、仕事優先の「父のような人」が結局好みだったわけで、昭和50年10月結婚にいたる。

(結婚後の仕事)

結婚前までは、「都会の人やけ、旅館の手伝いはしなくていい。」と言ってくれていたが結局、結婚したとたんに旅館の手伝いをさせられるようになった。接客経験など一度もないにもかかわらず、大勢の客の相手をしなければならなかったもので、つらい思いをした。しかし、お舅からは手伝いにくることが当然のように思われていたので、なにも言わずに子どもが中学校に入学するまで手伝いを続けた。

(結婚当初のころに苦労したこと)

相談相手は大島には誰もおらず、電話で晩方、もっぱら実母に話を聞いてもらっていた。

妊娠をして身重になり、旅館の調理室にいるとよく気分を悪くしていたがそれでも舅は「実家に帰ったほうがいい。」とは言ってくれなかった。と言うのは、大島の人には「昔は産み月まで田畑仕事をするのが当たり前。」だったので、舅もこれを当然としたのである。これを見かねた実母は、舅に早産の恐れがあるからと一言伝えてくれ、8ヶ月で里帰りさせてもらった。

こどもが小学校5、6年生のころに実母が亡くなり、ついに誰にも相談できなくなってしまった。実父に相談するが、実母が何でも出来る人だったので、その娘が出来ないことはない、「真剣に相談にのってくれることはなかった。旦那さんにも相談するが、舅に頭が上がらなかったため、何を言っても助けてくれず、誰にもわかってもらえないことを悲しく思っていた。

自分自身、実母がじっと耐えていさかいのない家庭に育ったため、いざこざがあっても黙っていようと思っていたが、つらすぎて一人泣いたこともあった。

そのうちに、体のあちらこちらがいたくなり、舅もなくなってしまったので、これを機会にもともと本家の旅館で舅、姑、夫の兄、兄の嫁と同居していたのを別のところへ引越した。このころから友人も出来始め、気持ちも楽になっていった。

(どのくらいで島に慣れたか)

周囲に親戚が多く、慣れざるを得ない面があったが、今でも大島に染まらない(または染まりたくない)部分がある。例えば大島の人にはうわさや悪口を言うことが好きだが、自分は嫌い。絶対に言わない。

(島におけるいいところ)

- ・自然が良い。喘息の子どもは、大島の空気がきれいだから治療になる。
- ・子どもの教育面で良い。先生と親同士のコミュニケーションが密だから何でもはなすことが出来て、例えば子どもになにか遅れが生じたときなどに気軽に相談できた。学校の役員をしているときは、ほかの親や先生と良く顔を合わせることが出来たので、とても楽しかった。
- ・近所付き合いが都会のほうよりもあるので、ちょっとした頼み事が気軽に出来るし、野菜や料理をいつも持ってきてくれるので助かる。
- ・大島に出たときに新鮮な気持ちになるし、刺激があって良い。昔は大島から出られると思うだけでうれしく、海が荒波の日であろうが無理してでも本土へ渡っていて、帰る時にはどうにかして大島に帰れなくなれば良いなあと思っていた。現在は、大島に帰ればほっとするし、10年くらい前からのんびりゆったり出来る大島は、住めば都だと思ってしまう。

になってきた。

(島における良くないところ)

- ・遊ぶところがなく、スナックが3軒だけ。
- ・食料品、衣料品が少なく、価格が高い。だから街に出たときに、欲しいものや珍しいものはどっさり必ず買い込む。
- ・歯科、小児科、産婦人科などの専門病院がないので、船代やバス代などが街の倍かかってしまう。昔は歯科が大島にもあったが、島だけでは経営が成り立たない。それに今は“利用者が選ぶ時代”だから、近くに病院があっても気に入らなければ行かない。
- ・病院がないのは不便であるが、大島から出られることが(特に若いころは)うれしかった。病気のとときや妊娠したとき、島から出られることによってストレスを発散できた。しかし、病院へ行くことで弱いと思われることがとても悲しかった。
- ・急患の場合、街の人のように病院を選べない。悪い病院へ運ばれると、後遺症が残るので不安。
- ・高齢者は、診療所が大きな病院へ紹介書を書いてくれると言ったシステムを知らないと思う。
- ・うわさが怖い。生涯レットルを貼られるし、悪口を言えば言い返される。
- ・自分の家族の良いところばかり言って、ほかの家庭のことは悪いことばかり言っているところが嫌。子どもが意地悪されたときに、意地悪した子どもの親に抗議しても、「うちの子はそんなことはしない。」と自分の子の否を認めないどころか、「子どものそんなことで言いにくるな。そんなことでなく子どものほうが弱いんじゃないか。」と逆に責められてしまう。
- ・本音で付き合える人が少ない。特に昔は、“大島根性”でよそ者という目で見られていた。
- ・大島の人気が強く、言い合いが激しい。でも、村人同士言い合いをし、切磋琢磨して大島を発展させてほしいとも思う。「大島に嫁いでからの、気の強さが影響していることに気づいて、驚いたこともある。
- ・子どもの学習面についていえば、良くも悪くも本土よりのんびりしていると思う。塾は宮崎地区に一軒と和尚さんが開いている学習会があるが、今の親は情報過多で大島の塾に通うだけではあき足らず、中学生は本土のほうへ特別夏季講習などを受講しに行っている。心配したってどうにもならないのに。

(今の現状)

独身のころによく行っていたクラシックコンサート、絵画展、工芸品展などにいきたい。今は一番に夫のこと二番に子どものことを考えているので、自分のことはすべて後回しにしている気がする。

海外にも行きたい。でも、自分が古い人間だから行くことが出来ない。何でも出来たほうがよいし、興味を持ったことは挑戦したほうがよいとこの年齢になって、なおさら思うようになった。

(将来について)

- ・離婚しない限り、大島にずっと住むつもり。子どもがいなくなっても、夏は誰にとっても大島はよいところだから。
- ・高齢化がすすみ、いずれは宗像市と合併して大島町になると思う。
- ・本土と大島に橋がかかればいい。船はいまだに船酔いするから嫌い。

(子どもの今後)

現在アメリカにて留学中なのだが、相手が外国人というのだけはやめてほしいと思っていた。けれども最近では、子どもの人生だから自分のしたいようにすればよいと思うようになった。どこかで元気に生きていればそれでよい。

今は子どもが親の面倒を見る時代ではないのだから、大島に帰ってきてほしいとは言わないし、面倒をみてほしいとも思わない。ただ、子どもが親になったときにどう思うかが問題だと思う。「あの時母さんは大変だったんやなあ。」と、苦労や気持ちを少しでもわかってくれるだけでうれしい。

(同年寄りについて)

ほとんど集まっていない。2年に一度あるかないかで、毎年集まっているわけではない。

(専業主婦について)

先に述べたように、子どもが中学校に入るまで親戚の旅館で手伝いをしていたけれど、土、日に働かないと行けない場合が多くて自分の時間を持ってないし、気を使うので、その後の手伝いを辞めて専業主婦をやりつづけたことに對して別に後悔はしていない。

「一日のうちで何時間が外へ勤めに行きたいな。」と少しは思うことはあったけど、島には仕事がないし、夫も一度も勤めるとは言わず、むしろ女は常に家にいるほうがよいという考えだったので働きにかなかった。大島は行政と住民の距離がとても近いから、役場でバイトなんでもってのほか！だった。自分のせいで、夫の仕事がやりにくくなったら申し訳なく思う。だから夫がうまく働いていけることは、半分は黙々と専業主婦をこなしている自分のおかげだと誇りに思っている。

特に40代くらい(今からおよそ15年前)までは、大島では仕事をしてお金をもらわないと、遊んでいると思われる

節があり、専業主婦 = すごく暇な人と考えられていた。ここは趣味に取る時間はないのが当然できりがなく働き、働くことが趣味のようなものだった。

しかし、自分は働くときは朝早くから一生懸命働いて、趣味の時間ももうけている。大島は何もないから、何もないなりに自分で工夫して趣味を楽しむようにしている。例えば自分は政治、経済に興味があるので、ラジオや新聞を一時間くらい聞いたり、みたりしている。またガーデニングも好きなことなので、近所で苗をもらいNHKのガーデニング講座をみながら自分でも挑戦してみたりする。

(一日の流れ)

4:00~5:00	起床 夫が目覚まさないよう、音の出ない仕事をはじめ (気を使うことが体に染み付いている)
8:20	朝食の支度、夫の支度の手伝い
午前中	庭、家の掃除
12:30	夫の昼食の支度
13:00	夫が家を出てから自分の昼食、食器洗い
13:15~14:45	御岳山に登山など、趣味の時間
16:00	夕食の支度
18:30	夕食の支度完了(夫がいつ帰宅しても食べられるようにしておく)
22:00	夫の入浴の時間(1時間くらい)
23:00	自分の入浴時間(10分くらい)
24:00	この時間くらいまでには就寝

・Eさん(63)

1)	職業	公務員の臨時職員
2)	旦那さんの職業	元漁師、漁協で無線の仕事
3)	同年の人数	2,3人
4)	兄弟関係	妹、本人
5)	出身	(大川の近くの)三漕郡
6)	家族構成	夫、本人、子ども(長男、長女、次女)はそれぞれ家庭を持っている

(結婚前の職業)

洋裁学校卒業後、家事手伝いをしながら近所の人の服を縫ってあげたりしていた。

(夫との出会い)

三漕郡に働きにきていた大島出身の男性の紹介で、お見合いをした。当時、大島では半年くらい沖ノ島などに漁に出かけていたので、漁師は正月くらいにしか家に戻らなかった。そのため旧正月の2月に嫁をもらう習慣があった。昭和37年1月にお見合いの話がきて、ばたばたその年の2月に結婚した。

(結婚後の仕事)

舅に「漁にでらんでいいけん、息子の世話だけしてくれればいいけん。」とってくれたので結婚を承知したのに、「おまえも手伝え。そげん人生は甘くないぞ。」と夫に言われ、専業主婦の傍ら船酔いしつつも漁を手伝った。

子どもが保育園に入るまで専業主婦であったが、その後福岡の天神で調理師の講習を受け、小中学校の給食調理員になる(パート12年、本職員14年の計26年間)。

3年前に定年退職したので、旅館や民宿の手伝いを週1,2回のペースでしていたが、時間や曜日がルーズだったので生活に張りがなかった。そこへ、今年の7月から村営のカレーやで短期の臨時職員を応募していたので、面接を受けて働くこととなった。勤務時間が定時であり、9:00~17:00まできちんと働けるので、からげにならなくて(=ルーズにならなくて)よくなった。(＊カレー屋は、海辺の近くに隣接されてある。海辺には食事する場がなく、以前は個人が経営していたこともあったが、成り立たなかった。大島村は観光客向けに赤字覚悟で、今年度はじめて試験的に営業を開始。今年の売上結果で、今後の運営が決まる。)

(島に来ての印象)

周りに何も無いこと、話し相手が誰もいないことがさみしかった。

(どのくらいで島に慣れたか)

子どもが小学校を卒業したころくらいから慣れた。子どもに友人がたくさん出来たので親同士も仲良くなったし、中学校で役員をしていくうちに外に出て行くようになって慣れた。

(結婚当初のころに苦労したこと)

・17:00から漁に出て行くなど、夜型の仕事に戸惑った(夜型の仕事といえばパン屋くらいしか知らなかった)。また魚の種類や季節によって、漁に出る時間帯や家を空ける期間(半年ほど家を空けることもあった)が変わり、不規則な生活にも困った。

・親戚関係が多いので滅多なことでは言えないし、いつもびくびくして怖かった。

・お舅が財布のひもを握っていたので、お金を自由にさせてもらえなかった。要りようのときには、いちいち頭を下げないといけなかったので嫌で、長女が小学校3年生になってはじめて自分で家計のやりくりをさせてもらうようになった。それまで本当につらかった。

・気持ちのほけ口がなかった。周りに悪口を聞いてくれる人がいなかったし、実家に帰ろうと思って船の時間を待っていると、そのうち冷静になり、置き去りにした子どものことを思ってやはり帰ろうと思いとどまっていた。

また嫁や子どもには落ち着ける場所がなくストレスがたまる。昼は夫が漁から帰ってきて寝ているので、家にいると邪魔になってしまう。だから、島の外に通院するときに一番の息抜きに。しかし病院にも勝手にいけず、お姑(またはお舅)が「行きなさい。」と許可してくれるまではいけなかった。

・昔は全自動洗濯機がなかったし9人家族だったので、漁から帰ってきてからの洗濯仕事は午前中いっぱいかかって大変だった。

(島におけるよいところ)

・子どもを自然の中で育てることが出来るのでよいと思う。また子どもがどこの家の子かわかっているので心配する必要もない。ただ、高校に入ってから都会に出さないといけなくて悩みが多くなる。

高校の先生となると、大島の小中学校の先生のように保護者と親密ではなく、顔を合わせるの入学式、卒業式、懇談会だけ。しかも同級生の親同士で、たがいの子どものことについてはあまり話をしない。

高校1年のときは土、日には帰ってきていたけれど、高校2年からは帰ってこなくなる。帰ってきて寝に帰るだけのようなもので、時間ももたないからあまりかえってこない。そのうちお金がほしいときなど、都合のよいときだけしか帰ってこなくなった。

結局、高校に入ると親元を離れるわけで、同じ境遇の仲間や大島出身の子ども同士で協力し合ったりして、このような関係作りが出来るのがよい。親より友人の存在が大きくなってくると思う。

・新鮮な魚、空気、自然がよい。

(島におけるよくないこと、ストレス)

・子どもの教育費問題。子どもの年齢がみんな近いので、高校に入ると一気に学費がかかってしまう。特に私立が二人もいたのでお金がかかって大変だった。高校を選ぶ際には寮の有無も条件にいれなければならない。

・漁師の子どもはかわいそうだと思う。というのも、両親が海に出ているのでコミュニケーションが少ないから。たまにお昼や夕方に、父親が起きて家にいると、「なんでお父さんがおらっしゃるの?」と疑問を抱く。

・人間関係、世間が狭いことですぐに噂になるのがいや。このことは今の若い人も同様だと思う。でも世間の噂を気にしていたら島での生活は出来ないから、開き直りが肝心。ずっと島にいると気持ちが沈むことがあるから、よそに出て買い物をして息抜きしている。買い物一つの楽しみ。

昔は特に親戚同士やおやおこし(=いとこ)同士の結束が固かったから、自分の噂ではなく自分の近い関係の人が噂を流されたりいじめられていても、子どもも大人も血相を変えて反発していた。

子どもの人間関係は意外と複雑で、親同士は結束が固くても子どもの中で仲間はずれがあったようだ。また子どものけんかやいじめに親の口出しは無用で、もし親に言いつけでもしたら子ども同士の関係がさらに悪化してしまった。と入っても、現在問題になっているほどの大きないじめはなかった。

(同年寄りについて)

おおよそ一年に1回、旅行へいったり食事をしたりしている。

同年寄りのほかに、「同胞の会」という筑後出身者の会合で食事に行ったりしている。

(プライベートについて)

プライバシーは、保護されていると思う。今は島にとついてくる人が多くなってきたから、その点はあまり問題ない。ただどの程度までがプライバシーの侵害になるのか境界線は個人によって違うので一概には言えない。

(今の現状)

結婚当初は息を詰まらせて生きてきたので、生活において楽しいと思ったことはなかった。

しかし夫の「人の目ばかり気にしとてもしぶんがきつだけ。人生短いんやけ、おおらかにいけ。」と言う言葉で少し気が楽になった。

今は周りにお舅やお姑、親戚がないので、自分自身も神経が図太くなってきた。あまりひとの目も気にならなくなった。今は夫との喧嘩を心置きなくしている。

(将来について)

一生涯ここに住もうと思う。確かになにか問題が発生したときは実家に帰りたと思うこともあった。しかし子どもにとって大島は故郷であり、帰ってこられる唯一の場。思い出も友人もたくさんあるこの場に、子どものためにもいたいと思う。

いつまでも街がいいとか島が悪いという考えは持たず、捨てていかないといけない。

(子どもの今後について)

高校でみんな外に出て、そのまま就職しているので好きなようにさせたい。

(離婚して大島に帰ってきた女性について)

離婚して帰ってきた女性は、島全体で4,5人いてみんな子連れ。大島にまだ自分の親のいる人。みんな仕事を持っている人だから、家族の協力が必要のよう。若いうちに結婚した人が多いから、男性のほうが頼りにならなかったのだと思う。再婚する人はまずいない。

(専業主婦について)

子育てのころまでは、子どもにとっては親とともにいるほうがいいので、専業主婦がよいと思う。そのうち子どもが親の手を離れると、働きたいと思うようになるのだけれど、大島には職場がないので困る。

(最後に一言)

・生活の在り方が変わった。今の家庭は普通、お嫁さんが家計をやりくりしている。しかし先にも述べたように、昔は舅が財布を握っているから大変だった。子どもにお金を与える際にも、自分からあげることが出来ず舅が直接与えていた。子どもに親としての示しが見つからないし、子どもはこのような事情を大きくなるまで知らないからつらかった。

もし現在もこのような生活だったとしたら、ますますお嫁にこなくなるだろうし、現代の若いお母さんには耐えられないと思う。

・大島に生まれ育った人は、「大島が一番いい！」と言う。でもそれは、「ほかの所を知らんたい！」と言ってやりたい。そういう自分でも最近では島の外に住んでいる娘のところに行き帰ってくるとほっとするし、やはり大島がよいと思う(笑)。

・Fさん(75)

1)	職業	元呉服屋
2)	旦那さんの職業	元漁師
3)	同年の人数	不明
4)	兄弟関係	弟、妹
5)	出身	大牟田
6)	家族構成	夫は他界、現在一人暮らし

(夫との出会い)

大島へ実父のいとこが、再婚でお嫁入りしたことがきっかけ。大島に遊びにくるように言われたので、妹と遊びに行ったところ、実父のいとこから継子の嫁にこないかと誘われた。ところが当時は戦時中で夫は戦地に出向いており、そのときはまだ夫と話したことも、あったこともなかった。

昭和21年に夫が復員して無事帰ってきたので翌年の昭和22年3月に結婚にいたり、実父のいとこが自分の姑になった。

(結婚前の職業)

高等学校卒業後、実家が魚屋だったので帳面をつける仕事をして家業を手伝っていた。しかし戦時中で、家の方に軍需工場へ働きに行く召集がくるため、それを避けるため叔父が勤めていた三井石油合成会社へ就職し、筆工(=事務)として3年ほど勤めることとなる。

戦時中は個人で売買することが禁止されており、隣組単位や会社単位でまとめて配給されていた。実家の店も魚が同様だったので、いわしやえそなどの魚を、勤めている会社へ渡すことも自分の仕事だった。

(結婚後の生活仕事)

3年ほど本家の長男の家で過ごす、昭和26年に分家として家を建てる。翌年の昭和27年、筑後で織屋(反物やかすりなどをあつかう)を商う実母の妹から、「輸入もんを扱ったら、店の景気がよくなったからあんたも大島で(商いを)やらんね。」と言われて呉服屋をはじめることとなる。

大島にはそのころ店がほとんどなく、戦時中だったこともあって面白いほど品物が売れた。その後も店は軌道に乗り、品物も呉服だけでなく洋服から下着、針などに幅を広げていき、呉服屋からよろずやへと変貌を遂げていった。

いっぽう夫のほうは夫の父が網師だったので、ともに網を作っていた。その後、何人かが集まって株式会社を設立し対馬のほうにさばきんちゃく(=サバ網漁)の漁へと出る。ところが不良続きとなり借金が膨らむ一方だったので、やむなく解散することにした。そして夫もともに店を商うことになった。

(島に来ての印象)

- ・海の美しさに感動した。
- ・自分を変なふうにはまたは睨むようにじーっと見るので、不思議な気持ちになった。やはりよそから来た人だから、好奇心の目で見てしまうのだと思う。見るだけで、話し掛けてこないのが面白く思った。
- ・野菜やご飯など何でも分け与えてくれるし、都会の人と比べると人がすれていないと言うか、純朴に感じた。

(どのくらいで島に慣れたか)

お姑が自分の親戚だったこともあって、お姑さんはやさしくしてくれ、何でも教えてくれたのですぐに慣れた。しかも友人に「同年寄りにはいらんねー。」と誘われてはいると、行事が多いのですぐに慣れた。積み立て貯金をみんなですて、そのお金でおいしいものを食べに行ったり、旅行をしたり、みんな和気あいあいだから楽しい。

むしろ島の外から来た女性のほうが、世間慣れしているから適応性が早いし、気も強いかもしれない。今にいたってはよそ者という意識もお互いにないし、いまは自分がみんなを引っ張るリーダー的存在になってしまった!

(島における良い事)

- ・みんな人情豊かで、家族のようなところが良い。
- ・空気、水などの自然のものがとにかく良い

(島における良くないこと)

- ・大きな病院がないことが不安。緊急な場合は神湊のほうで救急車が待機しているが、海があるから時間がかかる。
- ・映画を見たいといっても、ぱっとすぐに見に行けないことが不便。

(将来について)

- ・お金を出してもいいから、温泉に入れるようにしてほしい。しかしあまり環境が良くなると、今度は島の中が乱れてくると思うので、発展してほしいが悪い結果を招くかもしれない。

つづいて、大島に旦那さんと移り住んでから約1年になると言うGさんに、大島で一年間過ごした現在の心境を、またHさんには現在25歳になる妻について、それぞれ語っていただいたので以下に述べることにする。

・ Gさん(32)

1)	職業	専業主婦
2)	旦那さんの職業	漁師
3)	同年の人数	不明
4)	出身	東京
5)	家族構成	夫、子ども一人

(大島に居住したきっかけ)

夫が会社を辞めたときに、ちょうど大島の漁協が船団漁師の求人募集を新聞に載せていて、それに応募したこと

がきっかけ。一度見学に来たとき、すぐに大島の魅力に人目ぼれして住みたいと思った。

もともと夫も自分もいつか島で暮らすことを希望していた。四方を島で囲まれ、気候が温暖で、裸足で子どももベトナムも広い場所で思いっきり遊べる環境と言う島独自の魅力に、昔からあこがれていた。大島に移住してくる前は横浜に住んでいて、都会のマンション暮らしだと隣人の顔さえ知らないし、海まで行くのに何時間もかかってこのような環境に嫌気がさしていた。

(大島における良いところ)

・島にすぐに溶け込めるところ。組の会合や村の行事が多く、これらは新しく来た人でも参加しやすいし、またみんなも自分を誘ってくれるので新しく来た人を受け入れる環境が整っている。また年に2,3回行われる同年寄りも、このような環境の一つ。今年は夏に外でバーベキューをし、同年の人だけでなくその家族も参加していたので、みんななにげやかに楽しめた。

・人情が良い。みんないろいろなことを教えてくれたり、食べ物を家まで持ってきてくれたりとなにかと新設。何年かすむとまたわからないけれど・・・。

・自然が良い。空の色、空気の新しさ、草花のにおい、自然の音など季節感を感じられるところに深く感動を受けている。特に大島に来て、満月の晩の月明かりのすばらしさをはじめ知り、感じられるようになったことは本当に良かった。もし大島にこなければ、このような自然や季節の移り変わりに対する感覚が鈍感なまま生活を送っていたと思う。

(島における良くないこと、困ること)

・生活面で特に困ったことはない。

・子どもが急病な時など不安だし、病院に行くときもフェリーで行かなくてはいけないので、時間がかかって不便。

(来年大島を離れる理由)

今年になって東京に住んでいる実父が倒れてしまい、実母一人になってしまうので自分が面倒を見ないと行けない。夫には漁師を辞めてもらい、家族で東京に戻らなければならない。

(最後に一言)

都会で暮らすと、時間も人の流れもとても速いので、他人のことや環境のこと、自分自身のことについてゆっくり考えるひまがないほど忙しい。でも大島にきたら、自分自身に対しても人に対してもゆっくり付き合えるようになった。また自然や環境にたいして、何か出来ることをやろうという意識が以前よりも増したと思う。もうすぐ東京に帰ってしまうけれど、都会に帰っても都会にいるからこそ自然環境を守ること自分なりに努めていきたいと思う。

子どもにとって騒然とした都会のような環境が当たり前だと思って成長していくことは、かわいそうなことだと思う。子どもにも自然のすばらしさや自然を思う気持ちを培いながら大きく育てほしい。

・Hさん(47)男性

1)	職業	漁師
2)	奥さんの職業	専業主婦
3)	同年の人数	不明
4)	出身	大島
5)	家族構成	実父、実母、妻、子ども、本人
6)	奥さんの年齢	25歳
7)	結婚歴	3年

(妻との出会い)

妻が高校3年のとき、大島へサークルの研修できた際にはじめて顔を合わせた。サークルの顧問の教師と自分もともと知り合いで、魚などを宿泊先へ差し入れたことがきっかけ。そのとき自分は、現在の妻を女子高生の一人としてしか見ていなかったが、妻が自分に人目ぼれ。

その後交際が始まり、妻は高校卒業後に介護福祉士として働く傍ら、3年の交際期間を経て結婚にいたった。

結婚に行きつくまでには、決して容易ではなかった。それは妻が一人娘かつ、自分とはふたまわりも年齢に差があったので、妻の両親側から結婚の許可をなかなかもらえなかったからだ。そのようなわけで、大切な一人娘をもらっ

ただだから妻のわがままくらいは聞こうという気持ちから、妻が頻繁に実家に変えることや外出することを許している。

(結婚後、育児終了後の妻の仕事について)

結婚後は妻は仕事を辞め、現在は専業主婦となり子育てに専念している。妻には子どもが3歳になるまでは両親が親としての責任を十分に果たしたいと言う強い意思があるため、自分にも子育ての協力を求めてやまない。自分は良く子どもの面倒を見ているつもりだが、妻はやっているようでやっていないと言う。

「子どもが3歳になれば、仕事に復帰する！」と言う妻の意思を自分は尊重している。どのような仕事であっても、自分にキャリアや実力があればどんなに世の中が不景気であっても、企業は受け入れたい人材は採用する。妻にもそのような実力があるならば、生かしたほうが良いと考えている。ただし、自分の思いあがりだけで「自分は実力の持ち主だ」とおもっていても、企業にとっては低レベルの場合があるから、見極めが大切。また、人の下で命令に従って働こうと考えている人は、今からの社会には必要とされていないから働かないほうが良いと思う。

妻は介護福祉士の免許を持ち、3年のキャリアもある。それに加え、子育てで学習したこと(例えば自分の気持ちが荒れていたら、赤ん坊も荒れる。それは介護者と、介護される側の関係にも置き換えることができるということ)が今後、介護の仕事に携わるにあたって大きくプラスになるのではないかと考え、妻の仕事復帰に多に賛成している。

妻は介護の仕事とは、仕事の部分だけでは成り立たず、心の持ちようも非常に大切であるということを経験主婦の子育て期間を持って学ぶことが出来た。彼女の好きなようにさせてあげたい。

第6章 考察

第5章の「都市部女性による離島に対する意識調査」の結果をもとに、都市部女性が離島に求めていることや不安要因についてまとめながら、実際に大島に居住する女性によるアンケート調査や、大島に嫁いできた女性から得られたインタビュー内容、参考文献などと比較して考察とする。

6-1 離島男性との出会いについて

離島出身の男性との出会いの場として、質問にて「お見合い」を提示したところ女性の反応としては3つのタイプに分別することが出来た。1) どうでもいいタイプ = お見合い、離島男性に興味を示さない傾向(48.3%)、2) 消極的、好意的でないタイプ = お見合い、離島男性に興味を示す傾向(30%)、3) 積極的・好意的なタイプ = お見合い、離島男性に興味を示す傾向(21.7%)の3タイプである。

このたびのアンケート調査では、3)のタイプはほかのタイプのものより少数であるが、注目すべき傾向のひとつと言える。と言うのも、近年国内離島ではないが、諸外国の島々に嫁ぐ日本人女性が増加傾向にあり、また一時は廃れた見合い結婚が20代女性のあいだで人気復活の兆しを帯びているという現象が起きているからである。この現象を裏付けるものとして、「文芸春秋1996.9」と「朝日新聞ウィークリーエアラ1997.9.15」にて取り上げられていた記事を以下に抜粋する。

『結婚するならバリ島の男性』

日本人の女性とバリ島の男性の結婚が年々、増えている。何故、彼女たちはこの島で生活することを選んだのか。

インドネシア政府にとっては外貨獲得のためのもっとも有力な観光資源とみなされているこの島では、1988年政府主導のもとに新しいリゾートエリアが開発され、大規模高級ホテルが次々と建設されていた。それと時を同じくするように、この島を訪れる日本人観光客もうなぎ登りに増加し、その後は、ピークとなった一昨年には約40万人、世界第1位となっている。

今や日本人にとってすっかりメジャーな観光地となったバリ島だが、日本人がこれだけ押し寄せているから、それに比例して現地人との現地結婚が増えているのだとは簡単にいいきれない。結婚とはそれほど単純な問題ではない。加えて、観光で訪ねるときには「最高の楽園」であった場所でも、ひとたびその住民になってしまえば、「楽園」でありつづける事は難しいに違いない。

例えば、そのことを端的にあらわすのは、1)生活水準や生活様式の違い、2)経済格差、3)日本では廃れてしまった大家族制度や村落共同制度により成り立つ社会、などである。このような国の住民になるということは、日本人にとっては近代化の過程で置き去りにした束縛の中に再び戻っていくようなものなのだ。

この数年間に、現地の領事館に婚姻届を提出した日本人とインドネシア人のカップルは200組以上に上る。

ここ10年間の推移を見ると、1987年にわずか2件だった届出が、90年16件、91年22件となり、95年

には42件と増加傾向をたどってきた。現在も、なんとほぼ週に1件のペースで届けが出されているという。だが、実際の結婚数はそれをはるかに上回る300組とも、それ以上とも言われる。

福岡悦子さん(28)もバリ島の男性と結婚した日本人女性の一人である。彼女が結婚したのは5年前で、今、充実した日々を送っている。

「日本では、無理やり先に行こうという思いがあった。けれどもバリ島に来て、ぜんぜん違う生活を見て、こういうところから始めていくことは、私にはあうかもしれないと思えてきて。」

「こちらでの生活には満足感というのがあるんです。日本だと、これでも物足りない、あれでも足りないことと足りないことが多すぎる。こちらだと、比較の対象もないし、あるものでやりましょうということになるんです。」

豊かな時代しか知らないはずの日本の若い女性たちが経済的にみればはるかに遅れた国の若者たちとの結婚を選び始めている。この現象が顕著になったのは、きしくも、バブル崩壊の時期多くの日本人がそれまで信じてきた価値観に疑いをもち始めたときと重なる・・・。

(文芸春秋1996.9より)

『彼氏はいるけど結婚はお見合い』

お見合いは条件闘争可能

司法浪人中の智子さん(24)は、大学時代から付き合っていた彼とこの春わかれた。つきあう分には楽しかったが、結婚となると考えもしなかった障害が持ちあがった。

例をあげるとサラリーマン家庭の智子さんと、自営業の家で育った彼とでは、金銭感覚が違った。お互い努力すれば乗り越えられると最初は思っていたが、だんだん疲れてしまった。

「付き合っているときは話す必要もなかったことを、結婚が決まってから本格的に話してモメるんです。」

お見合いのほうが「条件闘争」できる。例えば智子さんの場合であれば、一生仕事をしていきたいこと、それについて文句を言われたくないこと。価値観の合う人であること。この条件を妥協してまで恋愛相手と結婚しようとは思わない。どちらかが我慢すれば、いずれ必ずひずみが出て破綻する。

お見合いなら、最初から条件を出してクリアした人だけ会う。それなら気に入る確率は高そうだ。それで性格さえ合えば「ラブ」はなくても生活は出来ると思う。

中途半端な束縛につかれ

恋愛中の彼氏がいても見合いする女性もいる。ライター的美穂さん(26)は最近、お見合いをした。彼氏(30)には内緒で。

「私、男友達がたくさんいて、よく遊びに行くんですけど、嫉妬しないでほしいんです。彼氏と友達は違うから、信じてほしい。」

こんなことは、彼氏にはいえない。「見合い」だからこそ。「結婚前提」だけどまだ「他人」だからこそ、話せるのだ。このストレートさが小気味よかった。

彼氏は好きだ。嫌われたくない。自分と結婚したいのかを聞きたいが、結婚の話題を持ち出せばきっと彼は逃げ出す。だから聞けない。束縛しないといいながら、彼は男友達と遊べば嫉妬する。好きだからこそ気を使う。

そんな、中途半端な束縛のされ方につかれていた。彼に結婚する気がないのなら、早くほかの人を見つけない。安定したい。無駄な恋愛に費やす時間が惜しいと思いはじめた。

恋愛は保守的!?

まだ23歳の琴美さんは、

「お見合いをしてみたい。」

と気軽に言う。

「おいしいものを食べられるし、もしあいてと気が合えば・・・、って期待もなきにしもあらず。遊び感覚というか、好奇心です。」

琴美さんは女子短大卒のOL。小さくてかわいくて、「守ってあげたい」と思わせるようなタイプだ。なのに、彼氏いない歴5年。

「へばい男とつきあうくらいなら、一人のほうがいいかな。」

と、思ってる。

お見合いがよいのは「女性側も相手を選べる」からだ。最初に「釣書」で条件を交換し合う時点では平等だ。あってみてだめだと思っても、恋愛と違い「他人のまま」で終わらせられる。琴美さんのように出会いの機会を求める女性以上に、先ほどの美穂さんや次に述べる淑子さん(24)のように実際に、恋愛で「うまくいかない」経験をした女性は切実に「見合い」へ傾斜するようだ。

淑子さんは数ヶ月前、彼氏と別れたばかり。自分の「男を見る目」に自信がなくなり、「お見合いがいかぬ。」と考え始めた。

「客観的な目のほうが当てになる、と思ったんです。恋愛で『この人だ』って結婚した人に限ってうまくいってなかったりする。むしろ、他人の目のほうがよく見えるんじゃないか。」

淑子さんの両親はお見合い結婚。燃えるような恋愛ではないが、お互いを大切にしている。「結婚と恋愛は別だと思ふ。結婚は、恋愛の盛り上がりがなくても出来る。恋愛のときは魅力的でも、いざ家庭生活となると困ることもあるじゃないですか。でも、地方はまだ『保守的』で、『結婚は恋愛で』って女性が多いんです。」

戦前は家同士の結びつきだった結婚は、「両者の合意による」となった戦後、団塊の世代を境に、お見合いから恋愛へと移った。それでも離婚するカップルはいる。「恋愛こそ幸せ」なんて幻想にすぎないと、若いうちから恋愛経験をつんだ今の若者は気づいてしまった。

(朝日新聞ウィークリーアエラ1997.9.15より)

以上のことから前者に関しては、20代といった若い世代にとって、お見合い結婚が今や新しいものとして受け入れられているように思われる。または時代が、後戻りしているかのようにも思われる。

以前までは、お見合いというと「売れ残り」を象徴するようなマイナスイメージがあり、否定的にとらえられていたが、現在では確実な「出会いの場」として若い女性たちのあいだで、人気が再浮上している傾向があることがわかる。

また諸外国の離島へ嫁ぐ日本人女性に関しては、これまでの価値観を捨て、自分の親の世代が作り上げた環境や意識に背を向けることで「自分自信の理想に近い生活、自分が本当に求めているものがある地」をもとめることが出来たのだと読み取ることが出来る。

よって現代女性にとって、これまで世間一般に理想とされてきた結婚の形が、必ずしも幸せであるものとして考えられなくなってしまったように思われる。

6-2 離島に対する女性の期待・不安要素について

分析の結果により都市部女性は、主に人間関係・自然環境・生活環境について期待・不安要素を抱いていることが明らかとなった。そこで各項目について、大島に居住している女性の意識や生活を垣間見ることによって実際はどのようであるのか検証していくことにする。

なお意向に示してある表は、すべて大島に居住している女性を対象に調査結果を示したものである。

(人間関係について)

表 - ア 日常における心情について(1)

次のような日常生活の場面で、あなたはどのような気持ちを持つと思いますか。当てはまるものに を付けてください。

・孤立する人を見ると、仲間に入れてあげたいと思う。

当てはまる	どちらでもない	当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
31	24	1	0	6

・結婚のお祝いはいまわりの人と相談する

非常に当てはまる	当てはまる	どちらでもない	当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
10	26	16	7	2	5

表 - イ 社会活動参加状況

以下の中で、あなたが現在参加している社会参加活動はありますか。当てはまるものすべてに を付けてください。(複数回答可)

自治会、町内会、婦人会などの活動	30	学習研究グループ活動	2
同年寄り	29	消費者団体などの活動	1
PTA、子ども会	16	政治、宗教活動	0
趣味、スポーツ活動	10	特になし	11
ボランティア、奉仕活動	7	無回答	7
その他の活動	3		

表 - ウ 年齢別出身地割合 (無回答 1)

20～30代(計17人)	
大島村	7人、41.1%
宗像市以外の福岡県内	6人、35.3%
福岡県以外の九州	4人、23.6%

40～50代(計26人)	
大島村	11人、42.4%
宗像市以外の福岡県内	9人、34.6%
福岡県以外の九州	3人、11.5%
その他	2人、7.7%
大島以外の島	1人、3.8%

60～70代(計21人)、80代(1人)	
大島村	14人、63.7%
宗像市以外の福岡県内	6人、27.3%
宗像市内	1人、4.5%
その他	1人、4.5%

表 - エ 日常生活における心情について(2)

次のような日常生活の場面で、あなたはどのような気持ちを持つと思いますか。あてはまるものにつけてください。

・ほかの人が噂話をしているところを見ると、自分も聴きたいと思う

非常に当てはまる	当てはまる	どちらでもない	当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
0	6	29	19	7	5

同年寄りの果たす役割 *同年寄りについては第2章を参照

離島女性に、「孤立しているところを見ると、仲間に入れてあげたいと思う」のか尋ねたところ、「非常に当てはまる」「当てはまる」という回答があわせて53%、また「結婚のお祝いはまわりと相談する」のかをたずねたところ、「非常に当てはまる」「あてはまる」あわせて54.5%と、どちらも半数以上を超えており、つまりこれらのことから人情厚く、かつ結束・団結力がある傾向にあるといえる。

また、現在どのような社会活動に参加しているのかをたずねたところ、自治会・町内会・婦人会などに所属している女性45.5%、同年寄りに参加している女性43.9%と多く、様々な人と交流できる機会があることがうかがえる。

17年前に大島に嫁いできたBさん(43)はインタビューの中で、「年に1回同年寄りがあるので、そこで友人が出来たし、交流が深まった。」

また、51年前に嫁いで来たFさん(75)も、「友人が私を『同年寄りに入らんね』と誘わっしやっただけで入ってみたら、行事が多いけ大島の生活に慣れたとです。」

大島に移住して一年目のGさん(32)も、

「大島のよいところは、新しく(大島へ)来た人でもすぐに島に溶け込めるところ。組の会合、村の行事が多く、これらは新しく来た人でも参加しやすいし、また周囲の人も自分を誘ってくれるので受け入れる環境が整っている。また年に2,3回行われる同年寄りも、このような環境の一つ。今年は夏に外でバーベキューをし、同年の人だけでなく、その家族も参加するのでみんなにぎやかに楽しめました。」

「人情がよい。みんないろいろなことを教えてくれたり、食べ物の家まで持ってきてくれたりとなにかと親切。」

と語っており、特に「同年寄り」は世代によって頻度や内容は異なるのであるが、新しく嫁いで来た女性と大島村民が交流を深めるために大きな役割を担っていることがいえる。

都市部女性は島における人間関係の温かさ、相互扶助の関係に対し大きな期待を持っていると同時に、孤立してしまった場合に不安も抱いていた。しかし、以上のことから大島には新しく移住してきた人を孤立させないような環境が整っていることがわかる。さらに、新しく島外から嫁いでくる女性が年々増加傾向にあることから(表ウ)、同じ境遇の女性どうし交流が深まり孤立に対する不安感は解消されるのではないだろうか。ただし、「他人と一定の距離を保ちたい」と思う女性にとっては、島全体が結束・団結力、相互扶助、多くの交流関係で成り立っていることから住みづらいことは否めない。

噂は島内情報ネットワーク

続いて、「何かあれば島中に噂が知れ渡ることが心配」という不安要素について取り上げることにする。

「ほかの人が噂話をしているところを見ると、自分も聴きたいと思う」のかをたずねたところ、「非常に当てはまる」・「あてはまる」をあわせて9.1%という結果が出た。

Cさん(44)は、

「噂は、次の日の朝刊よりも早く島中に伝わるので怖い。」

悪い噂が流れると、その家族に「～な家族」というレッテルを貼られ、末代まで続くことになるので怖いのだそうである。

またDさん(54)、Eさん(63)らも、

「噂が怖い。生涯レッテルを貼られるし、悪口を言えばいい返される。」

「人間関係・世間が狭いことで、すぐに噂になることがいや。今の若いもんも同じ気持ちやと思う。でも、噂を気にしとったら島の生活はできんから、開き直りが肝心やね。」

噂は島住民にとって、世間の狭さゆえに生じるストレスの原因になりかねない。しかしある時はよくない噂の標的とされた人が、またある時は噂の加害者となる場合もある。しかし、このような噂話も小さな島社会において必要な機能を持っていることも考えられる。というのは、現代社会は匿名的な人間関係が氾濫し、自分の周囲にいる人や自分とかかわりを持つ人々の顔が見えてこない社会が成り立っているという不安定な状況下にある。それに対し島においては、良くも悪くも個人の情報と本人の名前や顔などが一致する「実名社会」が成り立っている。この「実名社会」が島内の深い人間関係をより深いものにさせ、安定した安らぎを導いているのであると考えられる。

アンケートやインタビューの結果により、都市部女性や本土から嫁いで来た女性にとって、島内の噂は好ましくないものでありストレスの要因であることがわかった。このことを考慮した上で、島内の噂を個人の弊害とならない程度に情報ネットワーク機能として生かしていくことが必要である。

(自然環境について)

表 - オ 日常生活における心情について(3)

次のような日常生活の場面で、あなたはどのような気持ちを持つと思いますか。あてはまるものに をつけてください。

・自然に多く触れる機会が多いと、心が安らぐ。

非常に当てはまる	当てはまる	どちらでもない	当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
18	27	12	6	0	3

生活の中の自然

人間環境同様、都市部女性は自然環境から導かれる精神的安らぎや平穏を求めている傾向にあった。せは、自然環境に恵まれている大島の女性は、どのような意識を持っているのかみてみることにする。

離島女性に「自然に多く触れる機会が多いと、心が安らぐ」のかをたずねたところ、「非常に当てはまる」・「当てはまる」をあわせると54.5%に達する結果となった(表 - オ)。

専業主婦のCさん(44)は、

「朝方5時くらいの空がピンクでとてもきれい。」

夕方になると、浜辺に腰を置いて友人との会話を楽しんでいるというFさん(75)は、

「お嫁に来たころは、海の美しさに感動した。空気、水などの自然なものがとにかくよかんくさー。」

大島に移住してくる前までは横浜に住んでいたGさん(32)は、

「自然がよい。空気の色、空気の新しさ、草花のにおい、自然の奏でる音など、季節ごとに感じられるところに深く感動を受けています。特に大島に来て、満月の晩の月明かりのすばらしさをはじめ知り、感じられるようになったことは本当によかったです。もし大島にこなければ、自然や季節の移り変わりに対する感覚が鈍感なまま生活を送ってきたと思います。」

と、自然に触れることで体験した感動を、みんな口をそろえて述べてくれた。

またその他に、アンケート調査に協力してもらった大島の女性の方々から、「自然が好きだから、畑仕事をやっている。」「浜辺を散歩することが日課。」「御岳山はのぼりに行くことが習慣。」という話を聞くことが出来た。これらの話から大島において、自然とともに暮らしていくことが日常生活の中に溶け込んでおり、それは大島の女性にとって安らぎと感動を与えてくれるものであるということがわかる。一方で

「漁の仕事で、毎日海へ出て自然と戦っているから、自然に触れて安らぎを感じる余裕はない。」という意見もあった。これは、日常生活に自然が溶け込んでいるからこそ、または自然が身近な存在だからこそ、自然に対する意識が薄くなったものとも考えられる。このことは、表 - オにおいて「どちらでもない」・「あてはまらない」と答えた女性の場合においても、一部同様のことがいえるのではないだろうか。

(生活環境について)

表 - カ 日常生活における心情について(4)

次のような日常生活の場面で、あなたはどのような気持ちを持つと思いますか。当てはまるものを選んでください。

・ほしいものがすぐ手に入らないといらいらする。

非常に当てはまる	当てはまる	どちらでもない	当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
0	6	18	24	15	3

不便さが心の救いに

都市部の女性は、離島の「環海性」、「隔絶性」という特徴を認識しており、全般に離島に対して不便さを感じる傾向にあった。

「欲しいものがすぐに手に入らないとイライラする」かを大島の女性にたずねたところ、「当てはまらない」・「全く当てはまらない」あわせて59%と、半数以上の女性が物的資源の不足に対し、不満は小さい傾向にあることがわかる。

Aさん(41)は、

「大島は知っている人ばかりだから、気を使う。正直な気持ち、よその空気に触れたいと思うときもある。そんなときは子どもが学校に行っているあいだに、本土は買い物に行ってお金を稼いでいる。」

Dさん(54)は、

「病院がないのは不便だけど、特に自分が若いころは大島から出られることがうれしかった。病気のとて、妊娠したとき、島から出ることによってストレスを発散できた。」

またEさん(63)も、

「歯科や眼科などが大島にはないから、島の外は通院しているときが一番の生き抜きになった。」

と述べている。

島外まで出て行かなければならないという不便さが、不満の要因となるよりむしろ、島外から嫁いできた女性にとって、島内の世間の狭さゆえに生じるストレスの発散や息抜きの手助けに一役買っていることがわかる。

多彩な趣味、娯楽

表 - キ 専業主婦対象の一日の過ごし方

趣味・習い事
園芸、短歌、茶道、読書、歌謡曲、大正琴 音楽鑑賞、カラオケ、手芸、旅行、ちぎり絵 漁の道具作り、働くこと、ちぎり絵、散歩 ダンス、宗像ユリックスの講演会、登山 念仏、詩吟、舞踏
娯楽
パチンコ、テレビ鑑賞、踊り

生活環境に関して都市部女性は、「余暇の過ごし方、娯楽(施設)、楽しみがないのではないだろうか」という不満を抱いていた(13.8%)。

しかし、表 - キを見てわかるように実際は都市部女性と何ら変わりのない余暇を過ごしていることがわかる。

専業主婦のDさん(54)は、

「自分は、働くときは朝早くから一生懸命働いて、一日の中に趣味の時間を設けている。大島はなににもないから、何もなければ自分で工夫して趣味を楽しむようにしている。例えば、政治経済に興味があるから、ラジオや新聞を一

時間くらい聞いたりみたりしている。ガーデニングも好きだから、近所で苗をもらってNHKのガーデニング講座を見ながら自分でも挑戦してみたりもしている。」

Fさん(75)は、

「宗像のほうから週に一度、近くの保健センターで大正琴の先生がきんしゃって、教えなから習いに行きよとてす。」

都市部女性が予想していたことに反して、大島女性は多様な趣味や習い事、娯楽などを都市部で生活している人同様、思い思いに満喫しているよううかがえる。逆に都市部の人々以上に、周囲に何も無い環境だからこそ工夫を凝らし、楽しむことに対し貪欲に、より多く探求しているようにも思われる。

楽しむことに関して言えば、大島では個人単位にとどまらず、年間を通して行われる多くの祭り・イベント行事は村民の手で執り行われ、盛り上がりを見せている(第2章を参照)ことから島単位で楽しもうという意向がうかがわれる。

6-3 大島における仕事・教育・福祉について

都市部女性が離島に嫁ぐ場合に、必ず考慮しなければならない仕事、子どもの教育環境、福祉問題についても、大島での実際と都市部女性の意識とを比較しつつ考えていきたい。

(仕事について)

都市部女性の専業主婦願望

表 - ク 就業状況(有効回答60)

専業主婦	45	林業	0
会社員	0	畜産業	1
公務員	4	自由業	0
管理職、経営者	0	内職	0
商工自営業	3	自営手伝い	2
農業	0	パート・アルバイト	9
漁業	1	その他	1

表 - クを見てわかるように、有効回答の調査の範囲では68.3%の女性が専業主婦であった。職についている女性の中を見ても、旅館や寮の手伝い程度のパート・アルバイトをしている人がぜんたいの13.6%を占めて一番多い。

都市部女性に離島に嫁いだ場合、現在の仕事はどうするのか、また離職する場合は離島において就業希望があるかたずねたところ、全体の約3分の1の女性が「専業主婦になる」と回答した。推測から、その中でも「専業主婦になってのんびりし

たいタイプ」と「仕方なく専業主婦をやるタイプ」に分けることが出来た。

果たして実際、前者のタイプのように大島の専業主婦の女性はのんびりとした生活を送っているのだろうか。以下、それを分析する。

離島の専業主婦はのんびりしているのか

表 - ケ 大島の女性による専業主婦に対するイメージ

あなたの「専業主婦に対する印象」は、次のどれに該当しますか。あてはまるものすべてに を付けてください。(複数回答可)

	忙しい	損をしている	充実	楽しくない	刺激的	つらい	気楽	安定
専業主婦	19	4	6	5	0	2	13	11
女性就業者	3	1	1	1	0	0	9	5

	楽しい	ひま	窮屈	得している	不十分	自由	不安定	退屈
専業主婦	12	3	1	0	1	18	0	4
女性就業者	2	2	0	0	1	13	2	1

	楽しんでいる	その他	無回答
専業主婦	8	3	1
女性就業者	3	1	1

表 - ケでは、大島の女性に専業主婦に対する印象について訪ねてみた。専業主婦の女性、女性の就業者に分けてみると、専業主婦の女性は「自由・気楽・楽しい」といったプラスイメージが多かった中、それを上回ってマイナスイメージとして「忙しい(専業主婦全体の42.2%)」をあげていた。

一方、女性の就業者は「自由(女性就業者全体の61.9%)」、「気楽(女性就業者全体の42.9%)」、「安定(女性就業者の23.8%)」と、上位がプラスイメージで占められている。これは社会的責任や時間からの束縛といったものから解放されている専業主婦に対し、羨望のまなざしの意味を含めたイメージが結果として現れたものであると考えられる。それに加え「忙しい」と答えた女性は14.3%にとどまり、女性就業者にとって「専業主婦は忙しい」という認識が薄いということがうかがえる。

よってこれらの結果から大島における専業主婦のイメージは、専業主婦の女性にとっては多忙であるが充実しているというイメージを、また女性就業者にとっては、勤めている女性より専業主婦は気軽であるという異なったイメージがあることがわかる。

インタビューから浮かぶ20年ほど前の大島における専業主婦像

それでは、大島では専業主婦というものがどのような位置付けをされてきたのか、大島は嫁いできて、現在専業主婦をしている女性のインタビューからみていくことにする。

Cさん(44)は父親はサラリーマン、母親は専業主婦という典型的サラリーマン家庭に育ち、17年前に大島に嫁いできた女性の一人である。

「結婚当時は、『三度の食事さえ作ってくれさえすればいい。』と夫の家族は言ってくれたものの、大島では炊事は収入にならないから仕事のうちに入らないとみなされ、仕事をしていない女性は周りの目が冷たかったです。

大島の女性は、昔から「働く女性」が当たり前で、一人前とされてきたそうです。地元女性は1,2日寝ずに働き通しても大丈夫なそうですよ。

だから専業主婦は家事以外に、稼業、漁業、農協、民宿なんかでバイトや手伝いをしてなにか仕事を見つけないと、『働かな、おかしい』と周囲に思われていました。それがつらかったです。そこで私の場合は、一年間役場で働かせてもらい、その後はつわり(網漁のあみについているゴミなどを取る作業)など漁の仕事を手伝うようになりました。」

23年前に大島に嫁いできたDさん(54)も、父親は公務員、母親は専業主婦という家庭で育った女性である。「特に40歳くらい(いまから15年前)までは、大島では仕事してお金をもらわないと、周囲から遊んでいると思われる節があり、専業主婦=すぐ暇な人として考えられていた。妊娠をして身重になっても、舅は『実家に帰ったほうがいい。』とは言ってくれず、旅館の手伝いに行っている時、調理室でよく気分を悪くしていた。大島の人は昔は、『産み月まで畑仕事をするのが当たり前。』だったよう。ここは(大島は)趣味に取る時間がないのが当然できりなく働き、働くことが趣味のようなものだった。」

離島と都市部の産業構造の相違により、家庭における女性の役割が異なっていることから、サラリーマン家庭に育ち、本土から嫁いできて専業主婦となった女性たちが、戸惑いを隠せなかった様子がうかがわれる。

また大島では、収入のない専業主婦が家事だけに従事していることは、認められないことと考えられていたようである。そのため専業主婦は暇人と思われぬように、またお金を稼いでいない分、際限なく働き通していたという印象を受ける。このように昔は専業主婦が、過去大島において非常に厳しい立場に置かれていたようである。

それでは大島において、現在の専業主婦はどのようなものであるかをみていくことにする。

専業主婦の現在

表 - コ 専業主婦対象一日の過ごし方について

あなたは日ごろ、一日をどのように過ごされますか。当てはまるものすべてに をつけてください。ただし、社会参加活動については除きます。(有効回答数45)

家事	44	資格の勉強	0
育児	14	友人とおつきあい	29
介護	2	近所とお付き合い	17
畑仕事	12	趣味	21
買い物(島内)	30	娯楽	2
買い物(島外)	14	習い事	7
通院(島内)	10	床にふしている	0
通院(島外)	12	その他	8
旅館・民宿手伝い	11	無回答	0

表 - サ 配偶者を持つ専業主婦対象、夫の仕事を手伝う頻度について

あなたは配偶者のお仕事を手伝われますか。(または共にされますか。)

具体的にどのようなことをされているのですか。詳しくご記入ください。

毎日する	よくする	少しする	時と場合による	あまりしない	全くしない	無回答	計
5	3	3	10	3	15	4	43

内容: 漁の手伝い(銚子・網漁の手伝い、網にかかった魚介類やゴミを取り除く、漁船に乗り漁の手伝い)
ウニ製造、市場への出荷、民宿経営を夫より主立ってする、畑仕事、船のペンキ塗り

表 - コにあるように、大島で専業主婦をしている女性に主な一日の過ごしかたについてたずねてみた。すると「家事(97.8%)」、「買い物(66.7%)」という一般に専業主婦の仕事とされるものが最も多かった。その他では、やはり依然として24.4%の専業主婦が「旅館・民宿の手伝い」を日常的に行っていることがわかる。しかし「旅館・民宿の手伝い」を上回り、「島内での買い物」の66.7%、「友人との付き合い」の64.4%、「趣味」の46.7%が多く、一日を労働・仕事以外のことで過ごす割合も大きいことがいえる。

表 - サにおいて、専業主婦を対象に夫の仕事を手伝う頻度について尋ねたところ、「毎日する」が11.6%、「時と場合による」が23.3%、「全くしない」が34.9%と、夫の仕事以外にあまり関与しない傾向にあった。

過去20年ほど前と現在を比較すると、現在の専業主婦の仕事は依然として多忙である。しかし昔より人との付き合いや趣味など、自分の時間をうまく確保しており、このような傾向の専業主婦が増加したことから、それが大島の中で浸透し認知されてきたことがわかる。

この背景には表 - ウで見た通り、大島の男性に嫁ぐ女性で本土出身者の割合が年々増加傾向である、ということが関与していると思われる。離島では、漁業などの第一次産業が主流である。それに対して本土の産業構造は多少場所により異なるが、おもに第三次産業が占めており、必然的にサラリーマン家庭の割合が大きい。そうしたサラリーマン家庭で育った女性が離島へ嫁ぐことによって島に影響を及ぼし、離島の専業主婦の在り方が都市部の専業主婦のそれに類似していったと考えられる。

以下の結果から、都市部女性が「離島の専業主婦はのんびり出来る」と予想しているものに反して、のんびりしているとは言いがたく専業主婦には専業主婦なりに忙しいということが言える。だがそれだけでなく自分の時間も確保できており、かつ嫁いできた女性で本土出身の割合も多く島自体の意識も変容してきたことから、都市部女性が島に嫁いで専業主婦になったとしても、昔と比べると住みよい環境になったといえる。

表 - シ 専業主婦Dさん(54)の一日の流れ

4:00~5:00	起床
午前中	庭、家の掃除
12:30	夫の昼食の支度
13:00	夫は家を出てから自分の昼食、食器洗い
13:15~14:45	御岳山に登山など、趣味の時間
16:00	夕食の支度
18:30	夕食の支度完了 (夫がいつ帰宅しても食事できるようにしておく)
22:00	夫の入浴時間(1時間ぐらい)
23:00	Dさんの入浴時間(10分ぐらい)
24:00	就寝

ここでさらに、専業主婦Dさんの一日のスケジュールを見てもらい(表 - シ)、具体的に大島の専業主婦はどのように一日を過ごしているのかの参考にさせていただきたい。

大島の専業主婦の復職願望

表 - ス 専業主婦対象ライフステージと働き方のパターンについて

学校卒業後、結婚、出産、育児時に関係した女性の働き方を以下の5つのパターンに分けてみました。あなたは学校を卒業して働き始めたころ、どのような働き方をしようと考えましたか(卒業時の希望)。また卒業してから今までのあなたの働き方は、どのパターンに最も近いですか(実際のパターン)。現在あなたがもっとも望ましいと思う働き方のパターンはどれに近いですか(望ましいパターン)。それぞれに をつけてください。

	卒業時希望	実際のパターン	望ましいパターン
就職し、働きつづける	9	4	6
結婚で一時家庭に入り、 育児が一段落した後再び働く(いた)	11	4	7
出産、育児で一時家庭に入り、 育児が一段落した後再び働く(いた)	2	3	15
結婚により、仕事を辞めて家庭に入る(った)	10	19	10
出産、育児により、仕事を辞めて家庭に入る(った)	0	6	1
その他()	2	5	0
無回答	11	4	6
計	45	45	45

次に島に嫁いだ場合「仕方なく専業主婦になるタイプ」の都市部女性について、現在大島で専業主婦をしている女性の働き方のパターンを見ながら考えることにする。

表 - スにあるように、大島の専業主婦に学校卒業後、結婚、出産、育児との関わり合いで見た女性の働き方について、学校卒業時の希望・実際のパターン・望ましいパターンの3つに分けて尋ねてみた。すると学校卒業時には「結婚で一時家庭に入り、育児が一段落した後再び働く」が24.4%、「結婚により、仕事を辞めて家庭に入る」22.2%、「就職し、働きつづける」が20.0%で、復職型、専業主婦型、キャリア型の3タイプに分かれた。しかし実際のパターンを見てみると「結婚により、仕事を辞めて家庭に入った」の専業主婦型が42.2%と最も多く、卒業時に復職型やキャリア型を希望した女性も、実際は専業主婦になっていることがわかる。さらに望ましいパターンでは「結婚により、仕事を辞めて家庭に入った」の専業主婦型が22.2%と依然として多いのであるが、再び復職型やキャリア型の割合も高くなってきていることがわかる。

表 - セ 専業主婦の就業希望について

あなたは今、あるいは将来働きたいと思っていますか。

今すぐ働きたい	6
そのうち出来れば働きたい	13
働きたいと思わない・働かなくてもよい	16
無回答	10
計	44

加えて表 - セの結果から、実際は専業主婦となってしまったが復職を願う女性が多いことが顕著に現れている。

専業主婦のままにいる理由を尋ねたところ、「家事や育児と仕事の両立が困難」、「大島から仕事場までの通勤が困難」という意見があった。その他に「大島に適当な職場がない」という意見もあり、「仕方なく専業主婦をしている」女性が存在していて、これらの女性は「仕方なく専業主婦になるタイプ」の都市部女性と重なる部分があるといえる。

以上のことから今後、島全体で女性のための職場確保やサポート態勢を万全なものにしていき、「仕方なく専業主婦をやる(または専業主婦になる)」といった女性を減少させていく方向へと働きかけることが課題となる。

(教育について)

子どもの教育環境について

都市部女性に将来子どもを持つと仮定してもらい、子どもをどのような環境のもとで育てていきたいのかを子どもの成長過程、「幼少時において」と「ある程度大きくなり親の手から離れる時期において」との2段階に分けて答えていただ

いた。すると、幼少時においては「自然が豊富な環境」が31.7%と最も多かったのに対し、ある程度大きくなり親の手から離れる時期においては、情報化社会の現代に適応してほしいという願いが込められているのか、「自然が豊富な環境」にかわり「情報豊富な環境」が41.7%と最も多くなっていた。

では自然に恵まれた環境にある大島の母親は、大島における教育環境についてどのように考えているのか、インタビューに基づいて考えてみていくことにする。

現在高校一年生の長男・中学一年生の長女の2人の子どもを持つBさん(43)は、「自然が美しく、子どもを育てるにはよいところ。しかも小・中学校は少ないときで1クラスに6,7人のところもあり(現在の高校2年生)、幼稚園のころから小人数で一緒に育ったことから、家族のようにみんな仲良し。いつも自然に囲まれてのびのびと育ってきたので、大きないじめも見られなかった。」

Cさん(44)やGさん(32)も、「自然がよい。子どもを育てる環境に優れている。」

「子どもにとって、騒然とした都会のような環境が当たり前と思って成長していくことは、かわいそうなことだと思います。子どもにも自然のすばらしさや自然を思う気持ちを培ってほしい。」というように、大島の母親は自然の中で子どもを育てていくこと、そして自然環境だけでなく、学校と親の、子どもと子ども同士の関わりの深さに付いても誇りを持っている。「子どもの教育面でよい。先生と親同士のコミュニケーションが密だから何でも話すことができ、例えば子どもに何か遅れが生じたときなんか気軽に相談できた。学校の役員をしているときは、ほかの親や先生とよく顔を合わせることができたから、とても楽しかった。」

しかしその反面、やはり子どもが成長すれば学業や進学のことについて頭を悩ましていることは、都市部で子どもを育てる親も離島で育てる親も共通であった。Dさん(54)は、「子どもの学習面について言えば、良くも悪くも大島は本土の方よりのんびりしていたと思う。でもいまの親は、大島に塾が宮崎地区に1軒と寺の和尚さんがひらいている学習会があるのに、大島の塾に通うだけでは飽きたらず、中学生は本土の方へ特別夏期講習などを受講しに行っている。」

と、現在子どもを育てている親が、学習面で情報過多であり、情報豊富な環境を求めている様子を述べていた。

以上のことから大島は、教育環境に置いては自然の中で子どもを育てていくことを尊重している部分と情報社会に対応できるように情報収集することを重要視していく部分とを併せ持っており、それは都市部で子どもを育てている親と共通している。

(福祉問題について)

表 介護について

(1) あなたは介護の経験がありますか。

ある	ない	無回答	計
22	40	4	66

(2) 介護経験がある方は、どなたを介護しましたか？

自分の父	自分の母	夫の父	夫の母	夫	祖父母	自分の兄弟
5	6	6	10	4	4	2

夫の兄弟	子ども	親戚	近隣の人	その他	無回答
2	0	0	0	0	4

(3) 介護経験のある方は、どのように介護しましたか。また、介護経験のない方は、仮に家族に介護が必要とする人がいる場合、どうしたいですか。あてはまるものすべてに を付けてください。(複数可)

自分が世話	兄弟で世話	親戚と協力する	近所と協力する	施設に頼む
25	11	6	2	7
福祉、介護サービスや制度の利用		その他	無回答	
18		0	20	

表 た 日常生活における心情について(5)
介護を必要としている人が近所にいた場合、何か協力したいと思う。

非常に当てはまる	当てはまる	どちらでもない	当てはまらない	全く当てはまらない	無回答
12	26	14	0	9	5

介護問題についてー

都市部女性が介護問題についてどのような対処をしていこうという意向を持ち、また介護問題に直面した場合に、他者との関わりをどのように持とうと考えているのかを尋ねるため、自分の両親が介護を必要とするようになった場合を仮定してもらい答えてもらった。

その結果、「自分で世話する」「兄弟で世話する」がそれぞれ38.3%と最も多く、血縁者だけで対処していこうとする姿勢から、他者や地域コミュニティへの依存度が低い傾向にあることがわかった。

それでは同じく大島の女性の場合では、介護問題をどのように受けとめており、他者との関わりはどのようなものであるかを見ていくことにする。

表 ソの(1)でこれまでの介護経験お湯有無を尋ねたところ、全体の3分の1の女性が介護経験ありと答えていた。誰を介護した経験があるかの内訳を見てみると(表 ソ(2))、「夫の母親(45.5%)」、「夫の父親(27.3%)」、「自分の母親(27.3%)」、「自分の父親(22.7%)」という具合に嫁ぎ先の夫の両親や自分の両親など、自分に最も近い関係にある人を介護した経験のある女性が多かった。

加えて表 ソ(3)にあるように、介護経験のある女性に対してはどのように介護したのかを、また介護経験のない女性に対しては、仮に家族に介護が必要とする人がいる場合、どうしたいかを尋ねてみた。すると、「自分が世話する」が37.9%と最も多く、一方「近所の人と協力する(してもらう)」は3.0%と5%にもみたなかった。

これらのことから介護に関しては、都市部と同様に離島においても他者や地域住民への依存度が低いことがわかる。ただ、「親の介護を自分がやる」事に理由を詳しく聞いていくと、都市部とは異なる部分を見つけることができる。というのは、「介護の際に、軽いお願いや短期間の場合であれば近隣の人に協力してもらおうと思うが、ほとんどの場合が長期間に及ぶので迷惑はかけられない。」という意見が大島の女性の中であがったことから、大島では地域で協力しあう基盤はあるものの、介護の程度を考慮して「自分で世話をする」を選択している。対して都市部の女性の場合は、介護の程度に関係なく地域で協力し会える関係を築くことが、離島よりも困難であることから「自分で世話する」を選択したと考えられる。

今度は逆に、介護を必要としている人が周囲にいた場合に、大島の女性がどのように考えるのかを尋ねてみた(表 タ)。すると、「介護の協力を何かしたいと思う」女性が「非常に当てはまる」・「当てはまる」をあわせて57.6%で半数以上を占めていた。また「全く思わぬ(13.6%)」と答えた人の理由を尋ねると、「協力したいのはやまやまだけど、体力的に困難である。」という答えが返ってきた。

以上のことから大島では、自分の家庭内で介護問題が生じた場合には周囲に依存することなく、血縁者だけで対処していこうという街と共通した考えを持つ傾向にあることが読みとれた。しかしその一方で、他者に介護問題が生じた場合には協力的な意向を持っていることも確かなのである。

軒年、日本の島々は全国平均の約20年先を行く高齢化社会に突入していると言われている(表 チ)。そこで大島では高齢化対策に先駆けて、毎年ホームヘルパー養成講座が開講されており、大島の住民は参加をすることで介護技術を習得できたり、老人福祉について学習できたりしている。この動きは、大島住民による大島住民のための高齢化対策に向けた新たな一歩であると思われる。このような積極的な動きにより、多くの住民が参加していくことで島の共同性を基盤に、相互扶助の新たな形を形成していくことが大島の今後の課題であると思われる。その結果、島の高齢化に適切に対処できる方向が絞れた際に、家族や自己介護について真剣に取り組んでいる人も、大島への移住を希望し、様々な年齢層の島人口の増加が期待されると考えられる。

表 チ 離島と全国の高齢者比率

	離島	全国
平成 2(1990)	20.6%	12.0%
平成 7(1995)	25.2%	14.8%

日本の高齢化率のピークである25.8%と同じレベルにあり、過疎地域・奄美などのハンディキャップ地域と比較しても高い状況となっている。(国土庁調査より)

結論

このたびの調査で、都市部の女性の離島に対する意識が大きく2つのタイプに分化していることがわかった。その様子が顕著に現れている部分が、「離島に対する期待・不安」についてである。一方のタイプは、離島特有の団結性・共

同性・人情豊などといった性質から、人間関係の「あたたかさ」や「親密さ」、そこから導かれる心の安らぎを期待する反面、「自分だけが孤立してしまうのではないだろうか」と不安を抱くタイプである。またもう一方のタイプは、離島に対する期待や興味が特になく、前者のタイプとは逆に離島における団結性・共同性・人情豊かと行った人間関係を好まず、煩わしささえ感じるタイプである。このタイプについては、共同性の強い離島生活にはなじまないかもしれない。

しかし前者のタイプには、大島に居住する女性、および大島に嫁いできた女性に関する調査から、都市部女性の期待に応え不安を解消する地域づくりがなされていることがわかる。それは例えば、同年寄りであったり、子どもを通しての学校と家庭、親と親同士の交流関係であったりする。また大島の女性の中で、大島外から嫁いできた女性の割合が年々増えてきており、以前に比べると、「よそ者」を除外するような風潮は減少していることが言える。

このように「離島に関する期待・不安」について女性の意識が二つに分かれたのだが、その他に教育、福祉、仕事などについての意識を見た場合、さらに女性の意識が細分化されることが言える。それは教育面で例に挙げると、子どもが成長してからの教育環境を考える場合に、41.7%の女性が「情報豊富な環境」で育てたいと望んでいるのに対し、情報豊富よりは少数であるが「自然豊富(31.7%)」や「生活・居住機能が高度な環境(26.7%)」を望む意見もあり、アンケート結果からも女性の意識が分散していることがうかがえる。

これまで女性の求める結婚相手の男性像として、いわゆる3高の「高身長、高学歴、高収入」がよいとされてきた。しかし近年になって、このような表面的な条件ではなく、女性個人個人の様々な生き方を十分に補える環境と結婚相手が重要であるというように女性の意識に変化が現れた。この背景には、女性のライフサイクルと意識が、教育水準の向上、平均寿命の高齢化、従来までの家族制度の解体などによって以前とは全く異なるものとなり、多様な生き方を選択する女性が増加してきたことがある。それは結果として、女性が結婚相手を求める場合の地域差は減少して、その地域やその地域の人々の「質」が女性個人の生き方と適合するか否かということが問われる時代に突入したことを意味する。故に離島に居住する人々は、離島の地理的条件を悲観的に認識するのではなく、離島特有の性質を生かしつつ、離島や離島の男性と自分のライフスタイルとの適合性が高いと考えている女性や、離島に嫁いでくる女性の立場に立って考慮された「ソフト面」の充実に力を注ぐことが重要であると言える。例えば大島の場合でいうならば、先にも述べた離島住民と嫁いできた女性との親交を深める場の役割を果たす、「同年寄り」が一つにあげられる。

このように離島に嫁ぐ女性たちの「島内で孤立するのではないか」という孤立感・不安感を取り除き、加えて教育面や老人福祉面などを十分にサポートできる態勢が望める地域社会のあり方を考究することは、きわめて重要な課題であり、それが最終的には離島の確実な活性化へと導く結果となりうるのである。

参考・引用文献

- 大島村教育委員会 編 1990 「大島村史」 大島村
大村肇 1959 「島の地理 島嶼地理図説」 大明堂
河地貫一 1968 「離島地理学の方法論的序説 人文地理学の諸問題」 大明堂
宮本常一 1960 「日本の離島」 未来社
山階芳正 1951 「島嶼製に関する考察、東京大学地理学研究報告第2号」
日本離島センター 1992 「離島統計年報」
松村章子 1996 「文藝春秋『結婚するならバリ島の男』」(文藝春秋2編) 文藝春秋
長友佐波子 1997 「朝日新聞 WeeklyAERA『彼氏はいるけど結婚はお見合い』」(朝日新聞社2編) 朝日新聞社

謝辞

本論文を作成するにあたり、多くの方々に変なお世話になりました。

北九州大学文学部助教授の竹川大介先生には、本論文の構想の建て方や調査方法に関して終始多くのご助言・ご指導を頂き、誠にありがとうございました。

大島村滞在中には、アンケート調査協力の呼びかけや資料提供をしてくださった板矢英之さん、板矢純さん、そして二度の調査に渡り、宿の提供だけでなく私をご自分の孫のように慕ってくださり、何から何までお世話をしていただきました屋形トミエさん、いつも温かく見守ってくださり心より感謝しております。またインタビュー・アンケート調査の際には、お忙しいにもかかわらず答えがたい質問にも快く応じていただいた大島村の方々のご協力もありまして、無事調査を終了することができました。

厚く御礼申し上げます。

「何を求めて離島へ嫁ぐのか」 稲富 智子